中野市歴史民俗資料館収蔵品集成（古代編Ⅰ）

新井大ロフ

高丘丘陵古窯址群

平成15年（2003年）
中野市歴史民俗資料館

新井大ロフ

高丘丘陵古窯址群

刊行にあたって

昭和56年10月1日に、オープンした歴史民俗資料館には、考古資料から絵画にいたる様々な資料が収集されている。資料館では、毎年少づつ収集された資料を整理して、多くの市民の皆様に活用して頂くよう計画している。

その第一歩として、考古資料の収蔵品集成を刊行することにした。今回は古代の土器を集成した。弥生土器については、平成９年に集成を刊行している。収蔵品集成は第一義的に、本館の収蔵品を学術的に情報化する作業であるため、無味乾燥な感を否めないが、意味あるものと思う。こうした基礎的な情報の公開は資料館の大切な任務の一つであると考える。

収蔵し、展示するだけでは、その活用に限界がある。常に、中野市歴史民俗資料館の収蔵品を新しい視点から見直すためには多くの皆様に情報を提供していくことが必要である。そして、そこから得られた新しい情報を市民の皆様に提供していくことが大事なことだと考えている

平成15年３月31日
中野市歴史民俗資料館

新井大ロフ遺跡

1 はじめに

本図録は中野市歴史民俗資料館で所蔵している新井大ロフ遺跡出土土器のうち、実測が可能であった235点を収録したものである。

2 発掘調査の状況

中野市北部畑地灌漑組合は昭和44年11月中旬から、中野市新井集落付近で送水管埋設工事のため、幅約40センチメートル、深さ約50センチメートルの溝堀を実施したが、11月18日の朝、中野市新井大ロフ地籍の工事現場の二箇所から大量の土器が発見された。

この知らせを聞いた中野市教育委員会では急遽、緊急発掘調査を実施し、記録保存することにした。発掘調査は調査団方式で、11月20日から26日の七日間行われ、調査団長は金井汲次氏が担当した。

遺跡の所在地は新井大ロフ142番地、及び143の２番地である。中野扇状地の扇端に近く、標高は371メートル、ゆるやかに西にむかって傾斜する斜面上に位置する。大ロフ142番地をＡ地区、143の2番地をＢ地区とし、発掘調査を実施した。

調査はＡ地区に幅1.5、長さ5.6メートルのトレンチを設置して開始した。一帯は砂質土壌であり、容易に遺物包含層に達した。しかし、遺物は敷詰められたように広がり、遺物を検出は困難をきわめた。

Ｂ地区は送水管の埋設によって撹乱されていたが、そこを中心に拡張すると、遺物包含層は東西2.4メートル、南北3メートルの範囲に広がっていた。

（以上　金井汲次「中野市誌」（1981）より）

3 位置と立地

先述したように、新井大ロフ遺跡は中野扇状地の扇端部近くにある。地形は東から西に向かって緩やかに傾斜するが、遺跡の周辺は若干微高地となっている。

4 出土土器

極めて狭い発掘面積にもかかわらず、大量な土器が発見された。狭い範囲に集中し、高杯が占める割合が極めて高く、勾玉等の模造石製品が発見されたことから、これらの土器は祭祀に関わるものと考えられ、一括性の高いものである。

出土土器は壷、甕、杯、鉢、高杯、椀、はそう、須恵器杯に分類されるが、口縁部のみ、あるいは第１図７のように壷、甕どちらに分類すべきかあきらかでないものがある。

土器の器種組成をみると杯、高杯の出土数が圧倒的に多い。この遺跡の性格を反映しているためであろう。

A壷（第１図　1,2,13～16、第2図19～26）

壷は大きく二者に分類される。Ⅰ類は口縁部広がり、「く」の字状に屈曲し、球形の胴部をもつものである。胴部外面にミガかれているものの完全ではなく、ハケ整形痕が残る。Ⅱ類はやや細く長い口縁部をもち、扁平な球形の胴部をもつもので、いわゆる坩と呼ばれるタイプのものである。

Ⅰ類の壷の口縁部の形態は多様性がある。これらを細分すると、１二段口縁をもつもの（２図1718、21、26）、２素口縁のもの（１図１、８）、３強い回転痕を残し、口縁部端部にメントリをもつもの（１図１１、１２）の三者がある。

この他に、胴部のみで口縁部の形態が不明な土器がある。底部内外面にヘラ削りが観察できる。これを壷Ⅰ類の４（１図１５，１６）としておきたい。

このように、壷Ⅰ類の形態には多様性が認められる。こうした多様性の原因には、時間差、地域差、系統の差などが考えられるが、今後の検討課題としたい。

Ⅱ類の壷は細頸で扁平な球形の胴部をもつ。口縁部がやや内湾するもが多いが、第９図237や238のように、直立するものがある。口縁部の内湾が強いもの（9図236）ものもある。外面はハケ目をやや残すものもあるが、総じて良くミガカれる。また、内面に粘土紐の痕跡を強く残しているものもある。

B甕（第１図3～５、12）

甕は短く「く」の字状に外反する口縁部をもつ長胴甕であり、胴部最大径は胴部の中位にある。胴部に縦方向のハケ目を顕著に残す。第１図３は縦方向のハケ整形痕が顕著であるが、胴部がやや短い。本来ならば、別類に分類すべきものかも知れないが、甕の出土個体数は少なく、今回は甕を細別しない。

C杯（第2図27～第3図86）

内湾し、丸底をもつ。口縁部がそのまま立ち上がるもの（Ⅰ類）と端部がつままれたように外反するもの（Ⅱ類）がある。量的にはⅠ類が多い。

Ⅰ類は口縁部がそのままたちあがるものであるが、口縁部の内湾の度合いが強いものや弱いものまで幅がある。また、底部外面にヘラ削り痕を残すものや、内面に放射状の暗文が施文されるものがある。

Ⅱ類は口縁端部が指でつまんだようにやや外反するものであるが、数は少ない。

D高杯（第３図87～第7図208）

高杯は多様である。大きく５類に区分しておきたい。Ⅰ類は杯部が皿状を呈するもの、Ⅱ類は深い杯部をもつもの、Ⅲ類は内湾する杯部をもつもの、Ⅳ類は杯部の胴部に稜線の認められるもの、Ⅴ類は背部の口縁端部が指でつままれたように外反するものに分類する。

Ⅰ類は皿状を呈するものであるが、背部の底部に綾をもつものとそのまま脚部に至るものもある。これは別類に分類すべきかも知れないが、１点のみであるので本類に含めておいた。

脚部はほぼ中央がやや膨らみ、大きく開いた形状をもつものが大半であるが、膨らみの程度にも若干の差異がある。また、杯部の底部に見られる綾は杯部外面に明確に綾を形成するものとそうでないものがある。

このように、大きく分類することはできるが、ここの個体には変異の幅が大きい。時間差なのか作り手の個性なのか議論のあるところではある。

Ⅱ類は深い杯部をもち、杯部が大きい。第４図103と104が該当する。103は口縁端部がメントリされている。104は杯部の径が小さいが綾を有している。

Ⅲ類は杯部に稜線が認められるものである。第４図105と106が該当する。105は杯部の中央に一本の稜線が認められる。口縁端部は外側に開く、106は杯部に二本の稜線が認められ、杯部の口縁部は内湾する。

Ⅳ類は杯部の口縁部が内湾する類である。杯部は浅いものと深いものがある。脚部はやや短い。

Ⅴ類は杯部の口縁部がつままれたように外反するものである。杯部の底部に綾をもつものとそうでないものの二者がある。

Ｅ椀（第8図209～214）

椀状を呈した器種で、杯に比較して器高が高く、口縁部が内湾し、球形に近い形状を呈する。

Ｆ小型丸底壷（第8図215～224）

口縁部が「く」の字状に外販し、扁平な球形の胴部をもつ土器である。器表にはハケによる整形痕が残る。

Ｊ細口壷（坩）（第8図225～第9図242）

口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、扁平な球形の胴部をもつ。胴部の扁平が著しいものとそうでないものがある。また、大きさにも大小がある。

Ｈはそう（第9図243、244）

二例確認した。第9図243と244がそれである。243をみる限りでは口縁部に綾をもっている。244は口縁部が欠損しているのでわからないが、わずかに綾を認めることができ、両例は同様な器形となるのであろう。

Ⅰ須恵器杯（第9図245）

口縁部はヨコナデ、口縁端部にメントリを行うが、綾はゆるい。底部はヘラケズリされる。

5 出土土器について

笹沢浩は古墳時代の土器をⅤ期11段階に区分している（笹沢1985）。本稿では、この編年案を踏襲し、大ロフ遺跡出土の土器を検討したい。

第Ⅰ期　弥生時代後期後半の箱清水式土器と中島式土器が東海・北陸地方の土器の流入とその影響を受けて解体をはじめた段階。

第Ⅰ期古段階

在地の弥生土器の解体、小型器台、元屋敷古段階のＳ字甕口縁台付甕、高杯からなる。

第Ⅰ期新段階

畿内、東海地方西部、越後系の土器が多量に見られ、在地系土器が少なくなる。

第Ⅱ期　在地の弥生系土器が消滅し、新たに畿内系の布留式土器の影響を強く受けた土器が登場する段階。

第Ⅱ期古段階

第Ⅰ期新段階に見られた越後系土器は残存するものの、布留式土器の影響を受けた小型丸底壷、鉢、器台、有段口縁部壷や甕などと、赤塚編年第3類のＳ字口縁台付甕がある。

第Ⅱ期新段階

畿内色を強める一方、Ｓ字状口縁台付甕のヨコハケがなくなる。

第Ⅲ期

第Ⅲ期古段階

壷形の小型丸底土器の出現期、Ｓ字状口縁台付甕が退化したものが残存、3,4段成形の高杯が出現する。

第Ⅲ期中段階

壷形の小型丸底壷の最盛期、Ｓ字状口縁台付甕の消滅、内面に屈折のある杯が出現する。

第Ⅲ期新段階

壷形の小型丸底壷の衰退期、杯がその数を増やす。椀形の杯が出現する。

第Ⅳ期

第Ⅳ期古段階

卵形胴部をもつ甕の出現、大型の壷がなくなり、有段口縁壷が消滅する。

第Ⅳ期中段階

甕形土器は長胴化がすすみ、器外面をハケまたはヘラで削る手法が一般化する。

杯では内面が屈曲するものは姿をけし、胴部中央で屈曲すり杯が出現する。

暦年代的には6世紀前葉から中葉のものと考えられる。

第Ⅳ期新段階

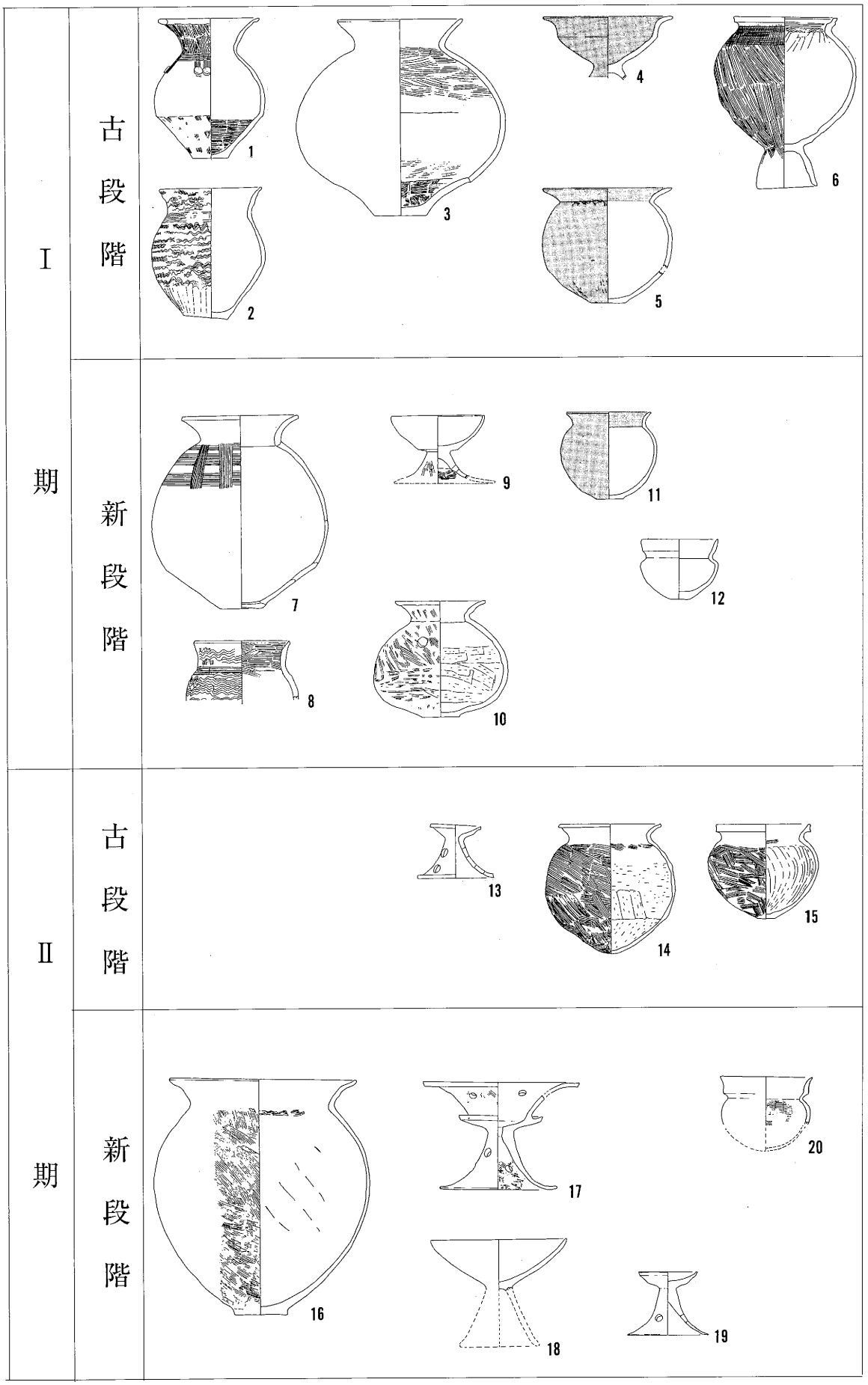
黒色土器が大半を占めるようになる。杯の屈曲部が下がる。長胴の甕がある。

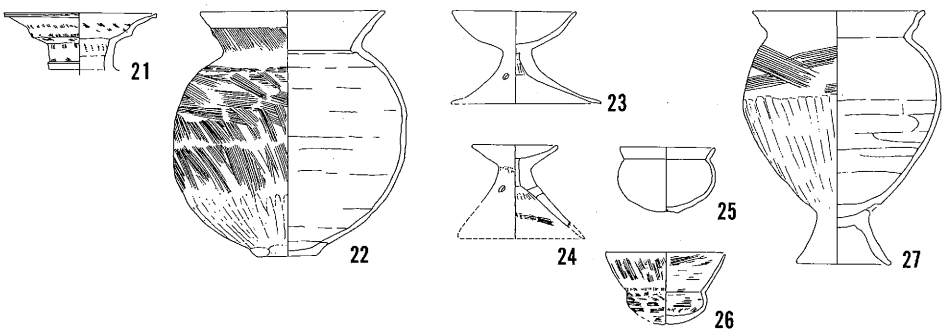
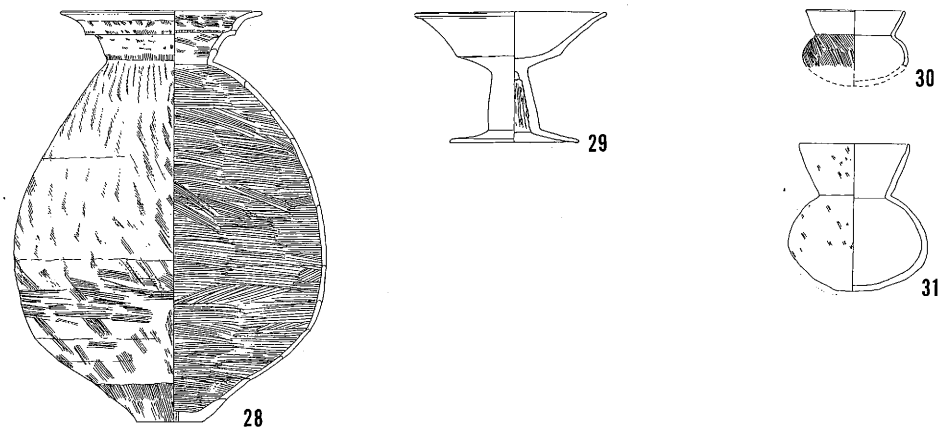
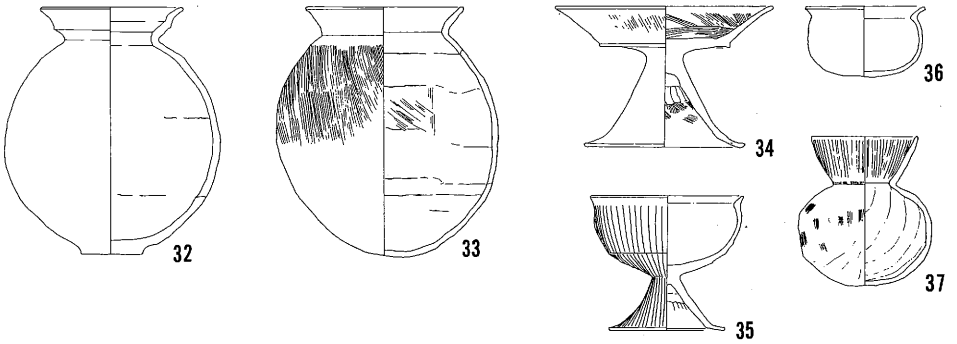
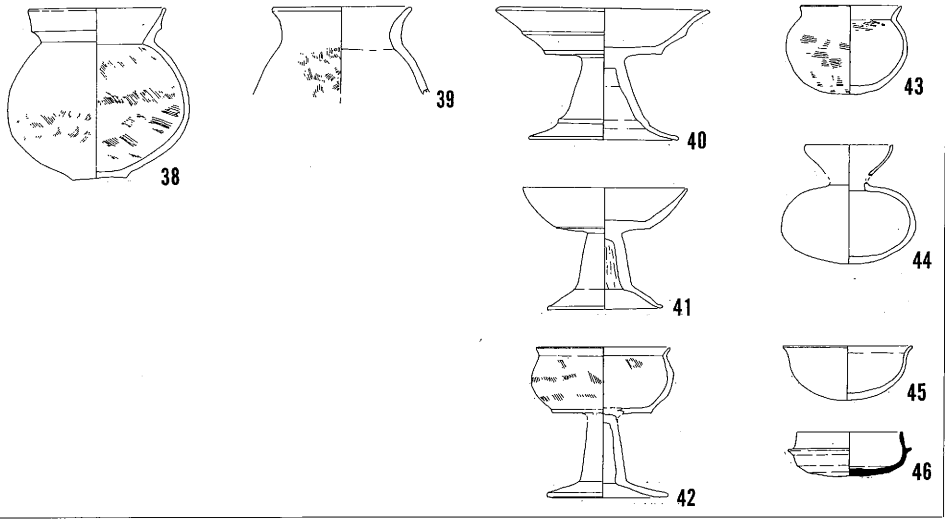
暦年代的には6世紀の後半から7世紀の初頭になる。

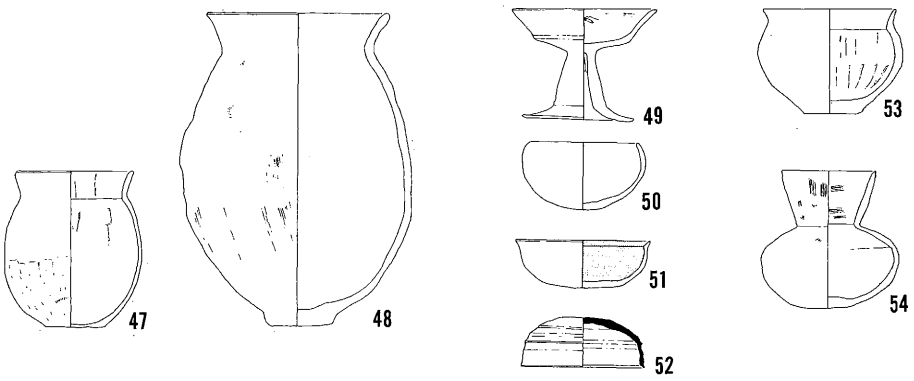
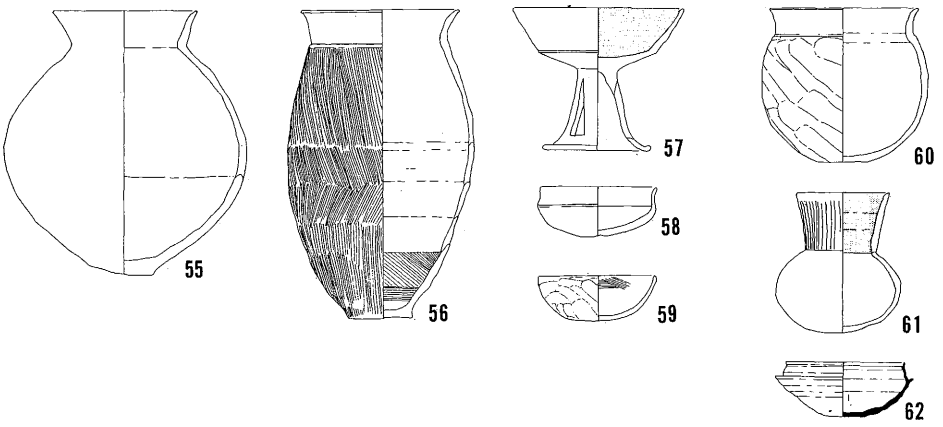
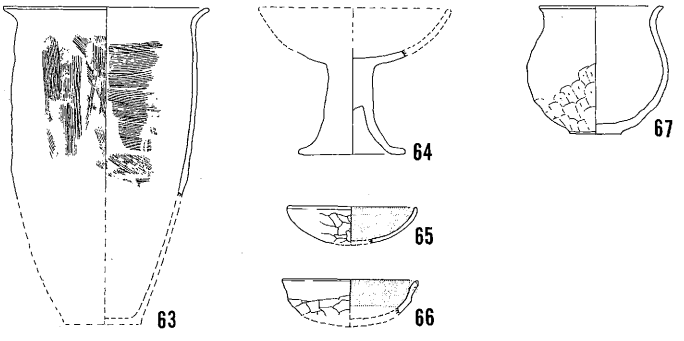
第Ⅴ期　金属器を模倣した土器の出現。土師器は煮炊きに、須恵器は貯蔵や食器に用いるようになる。古墳時代から奈良時代への過度期である。

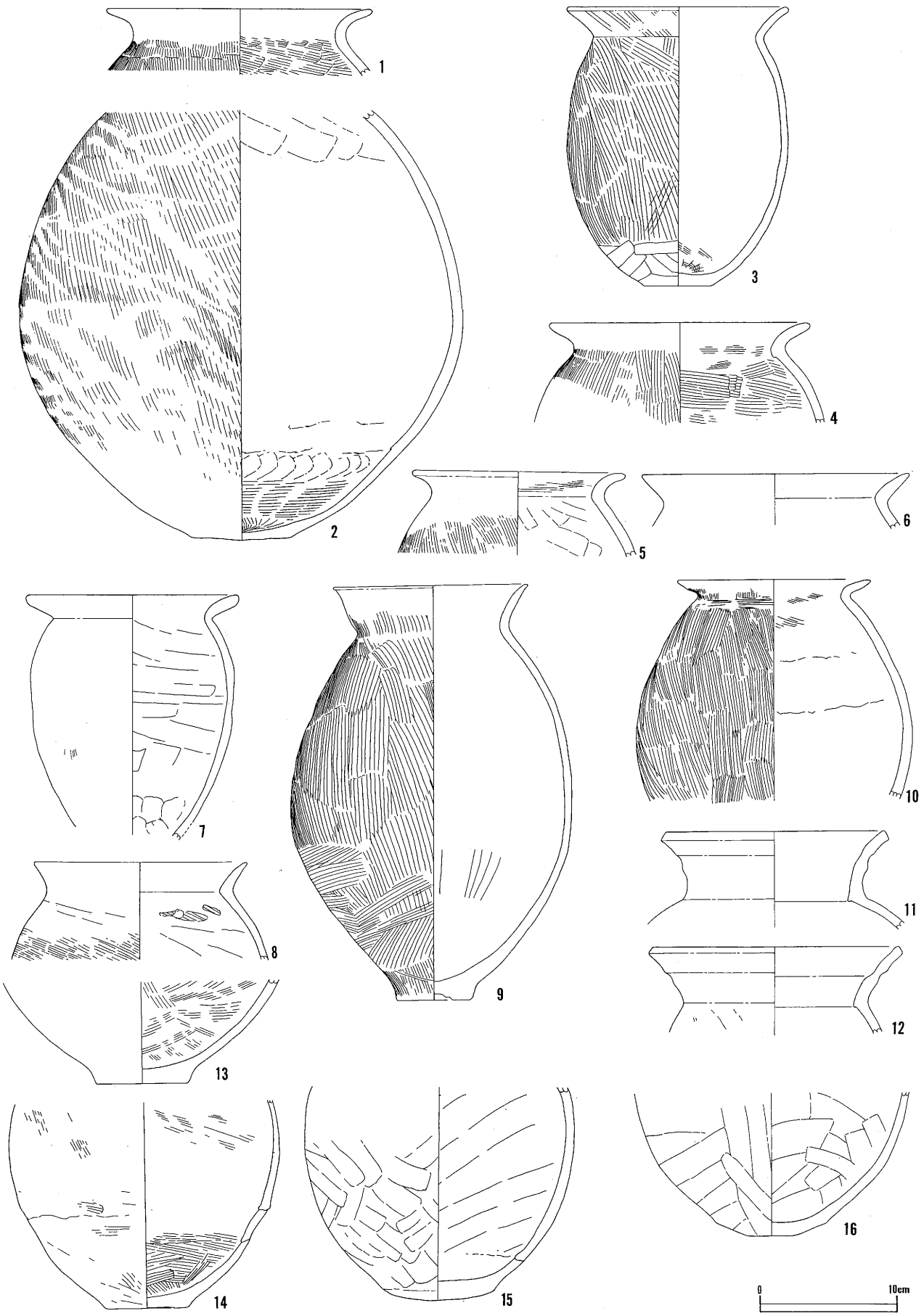
笹沢編年の概要は以上のようにまとめられる。

とすれば、新井大ロフ遺跡では有段口縁壷の残存、卵形胴部よりもやや長胴の甕などの諸相から概ね笹沢編年のⅢ期後半に位置づけられよう。しかし、一括性が高いと考えられる新井大ロフ遺跡出土の土器には古い様相と新しい様相が混在しているようにも見られ、今後の検討課題としたい。

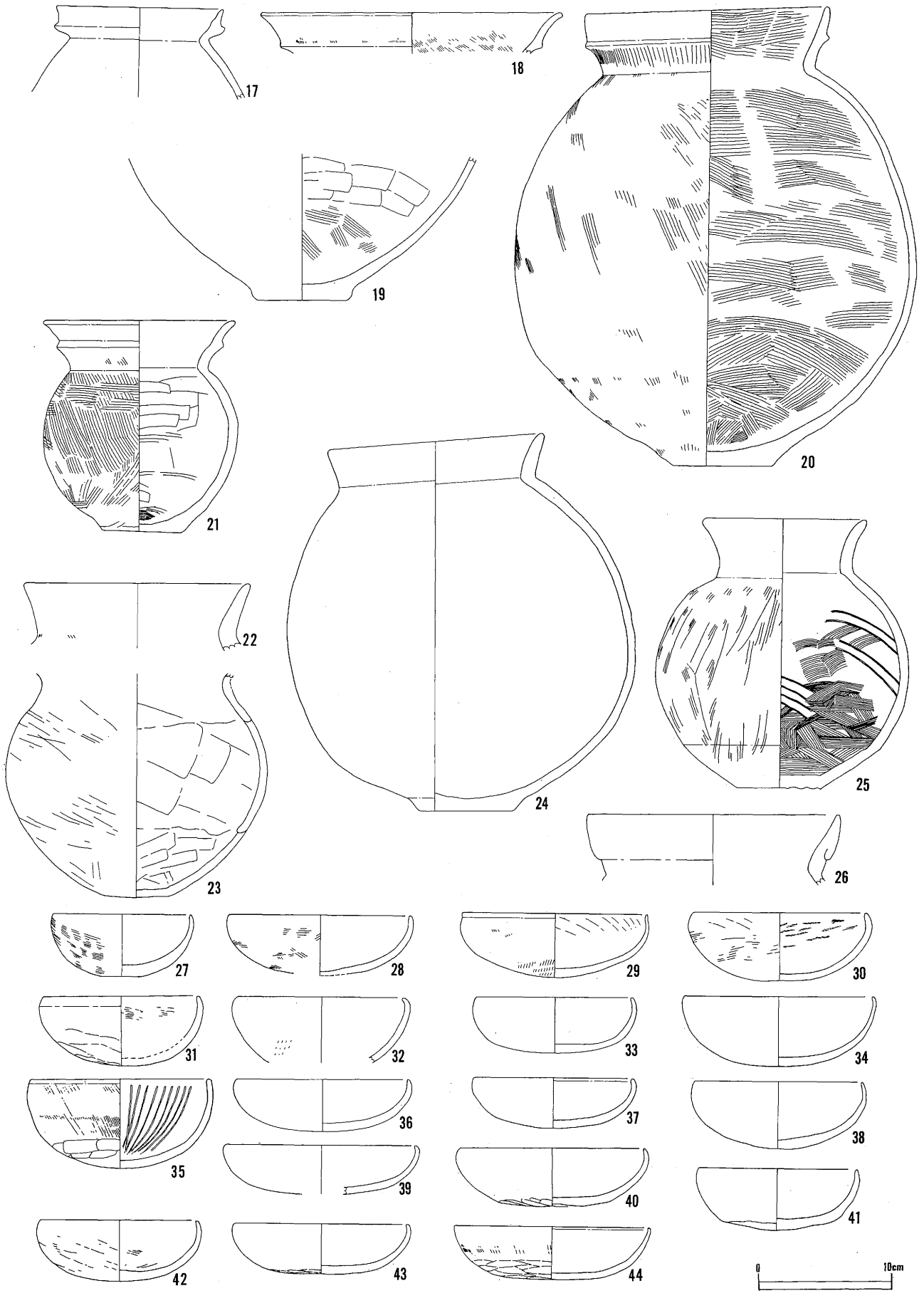

Ⅰ
期
古段階
新段階
Ⅱ
期
古段階
新段階
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

Ⅲ期	古段階	
	中段階	
	新段階	
Ⅳ期	古段階	

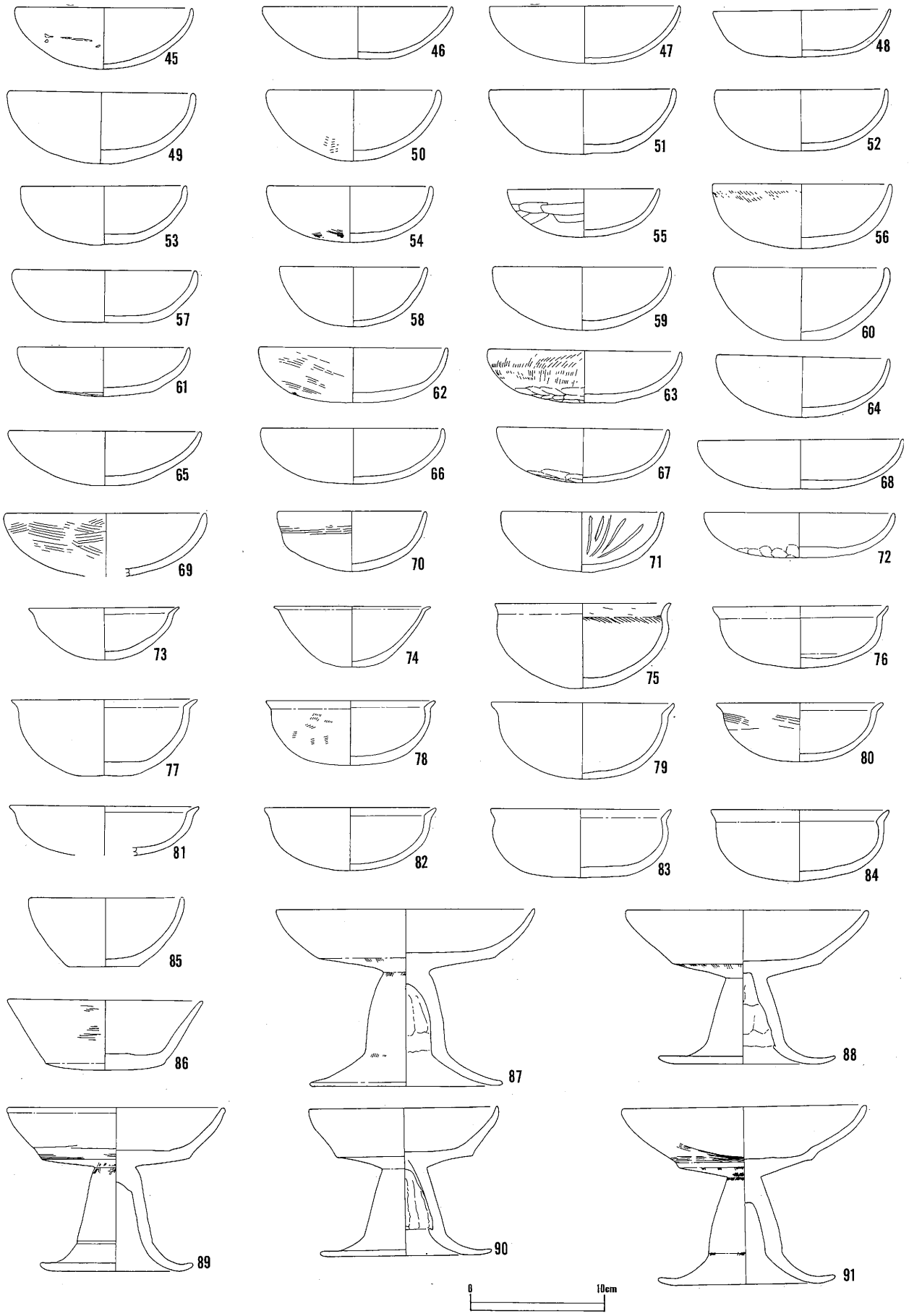
Ⅳ期	中段階	
	新段階	
		



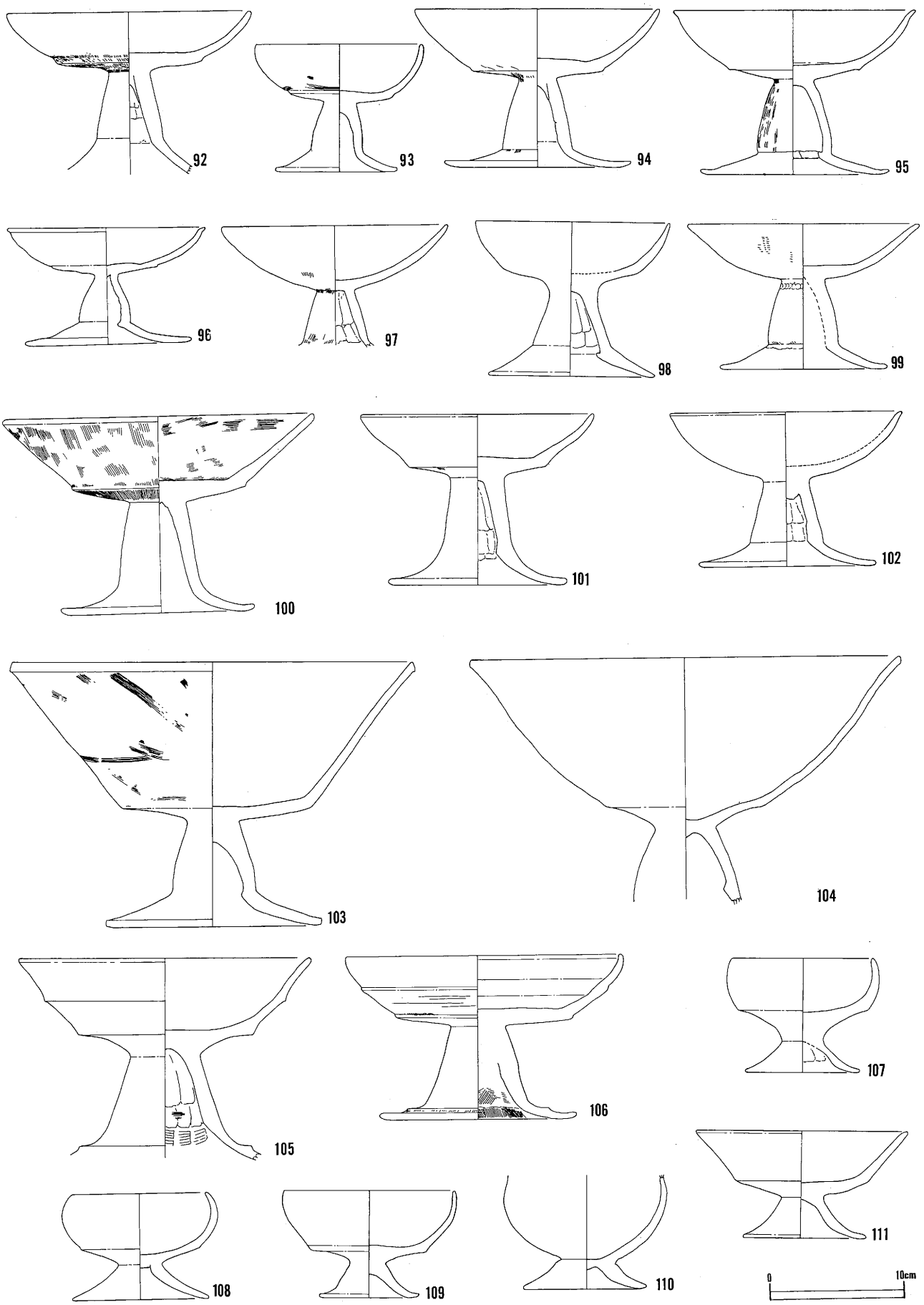
第3図　土器（1）


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
10cm

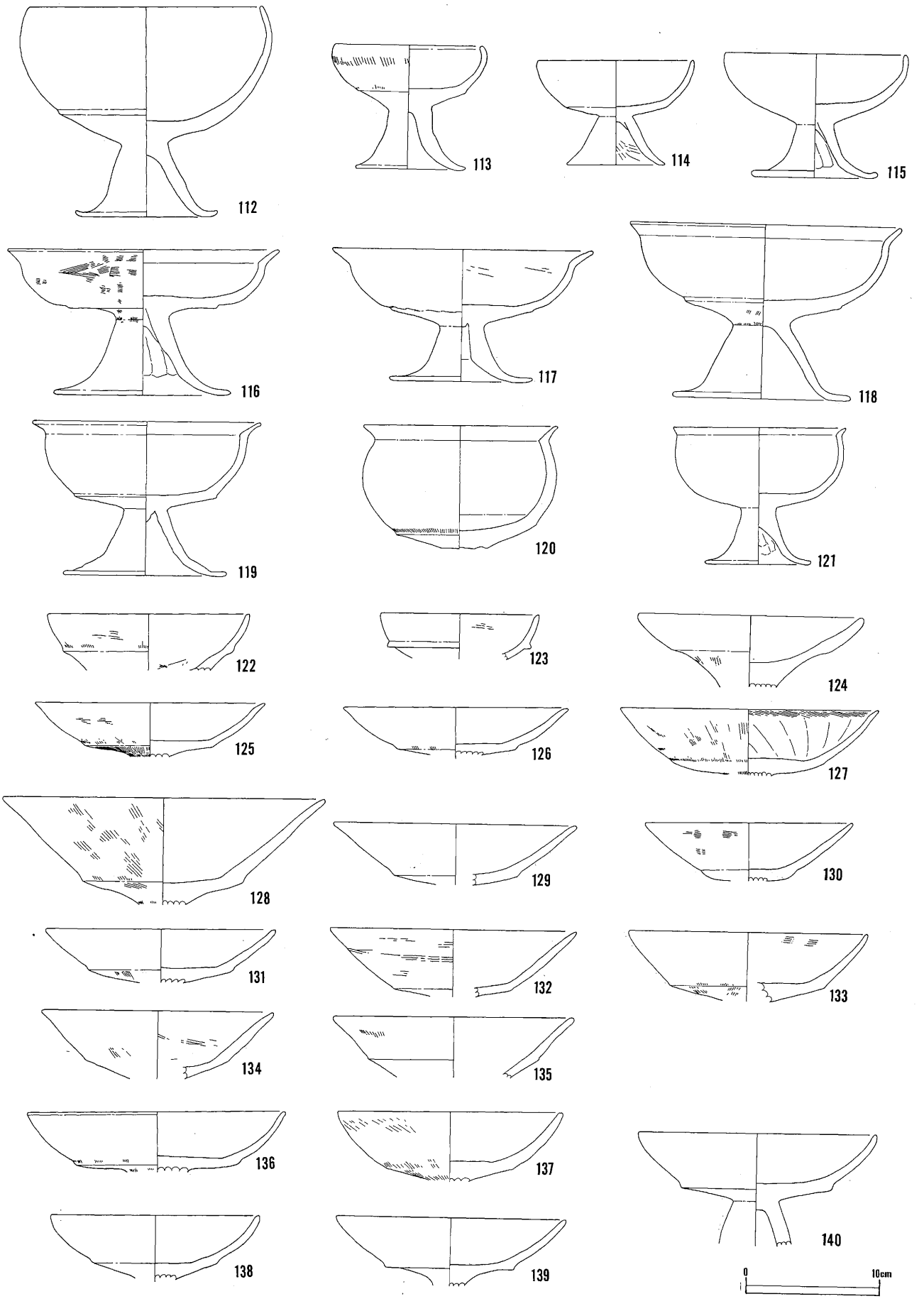
第4図　　土器（2）


45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
0
10cm

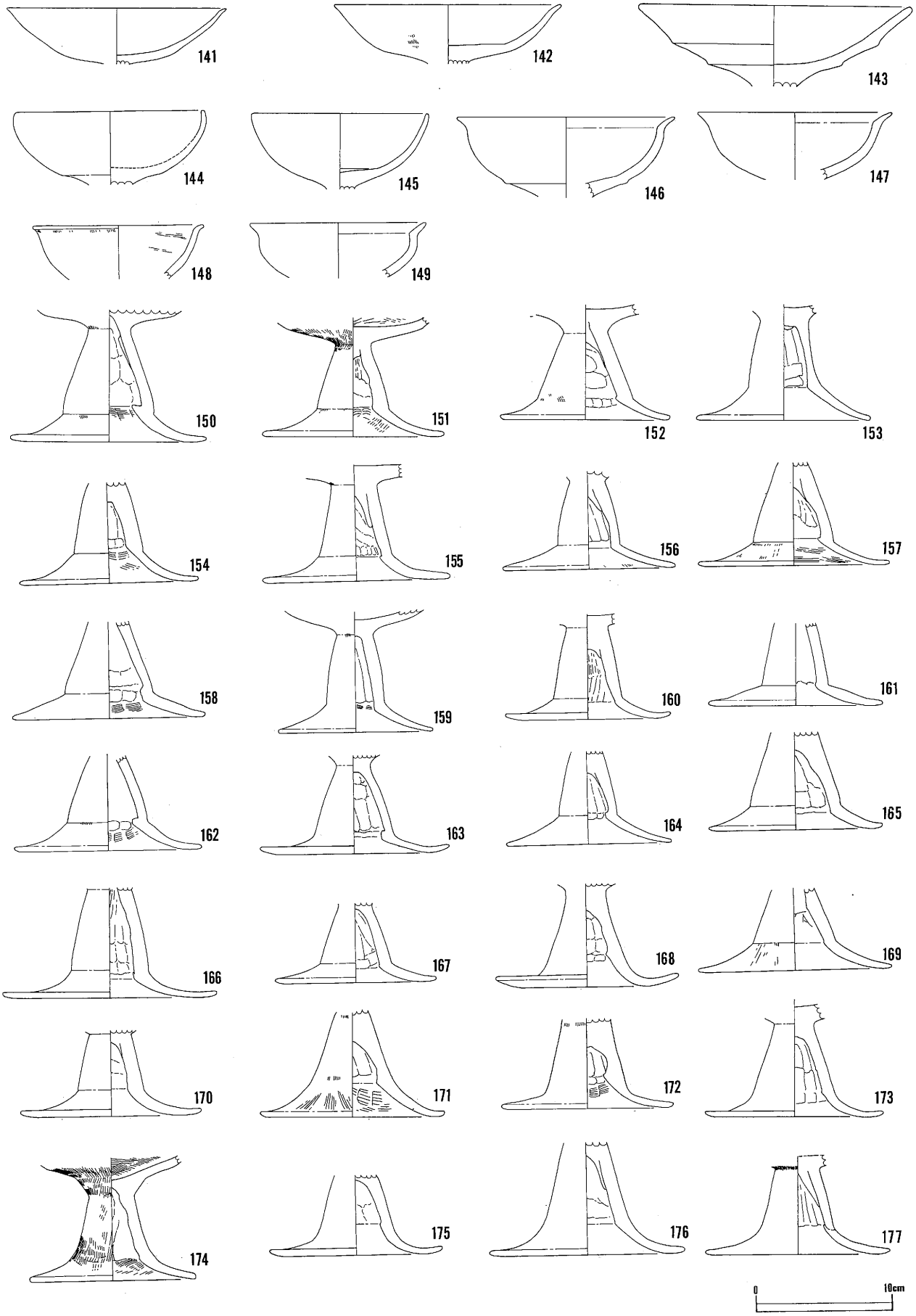
第5図　土器（3）


92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
0
10cm

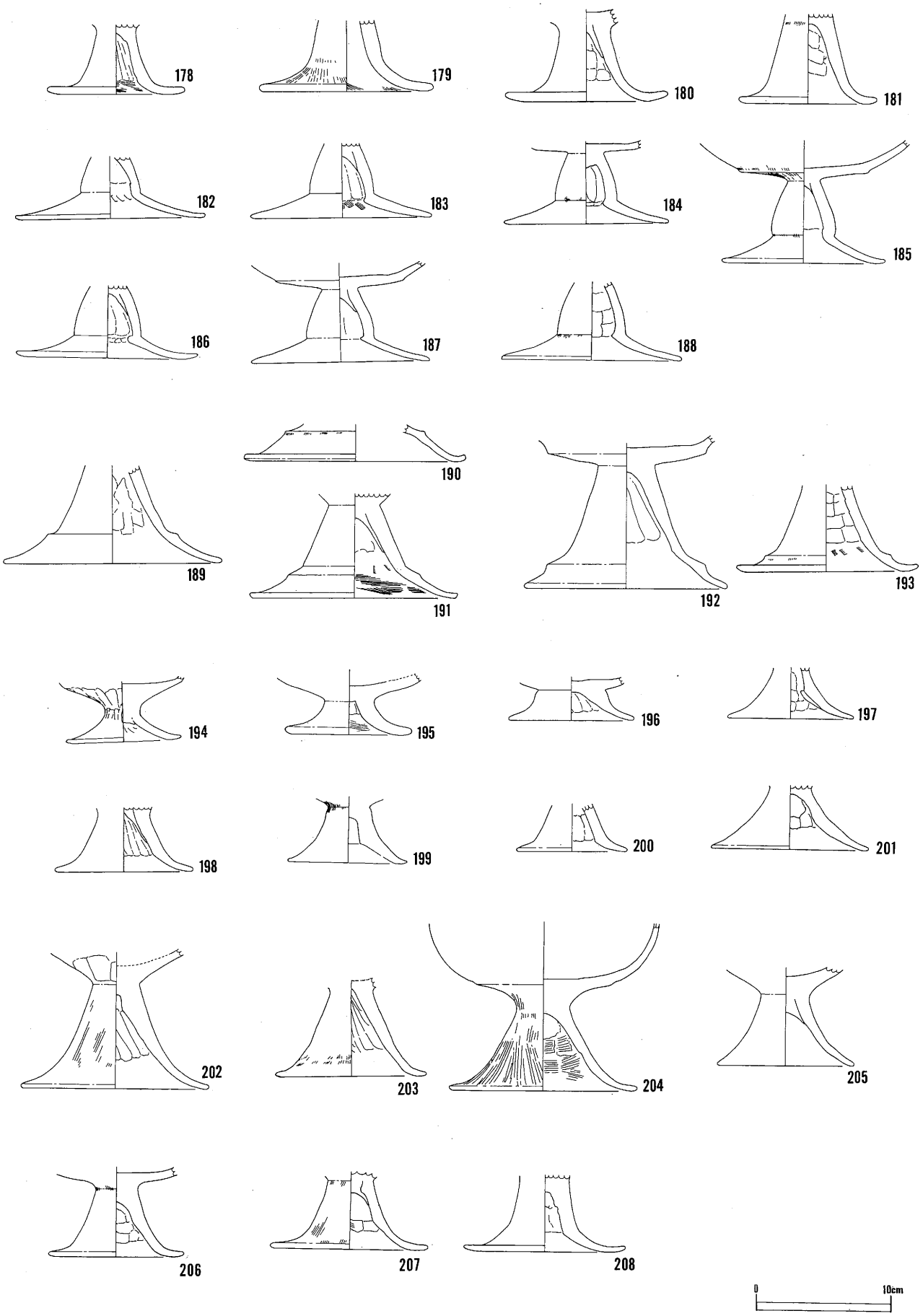
第6図　　土器（4）


112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
0
10cm

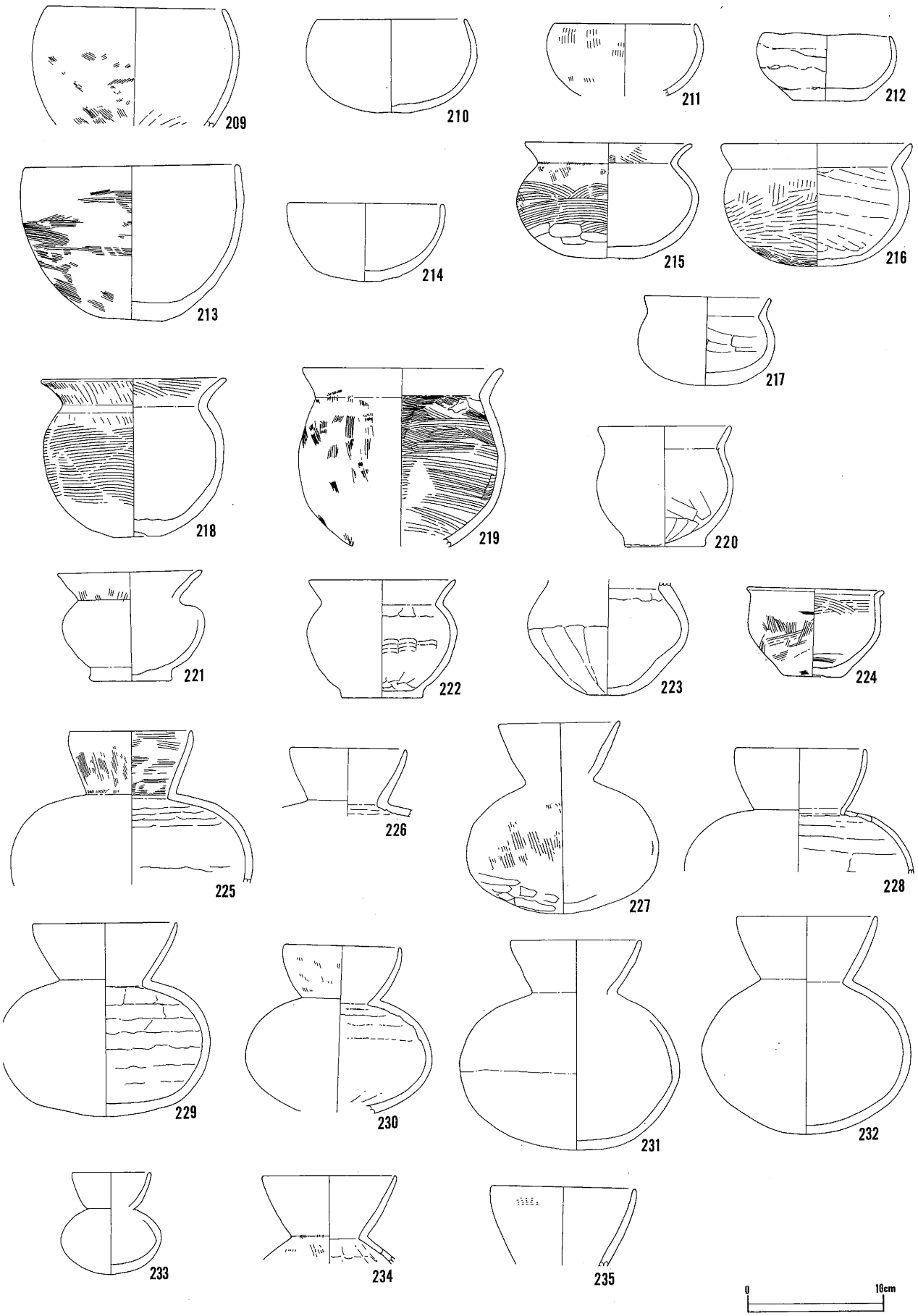
第7図　土器（5）


141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
0
10cm

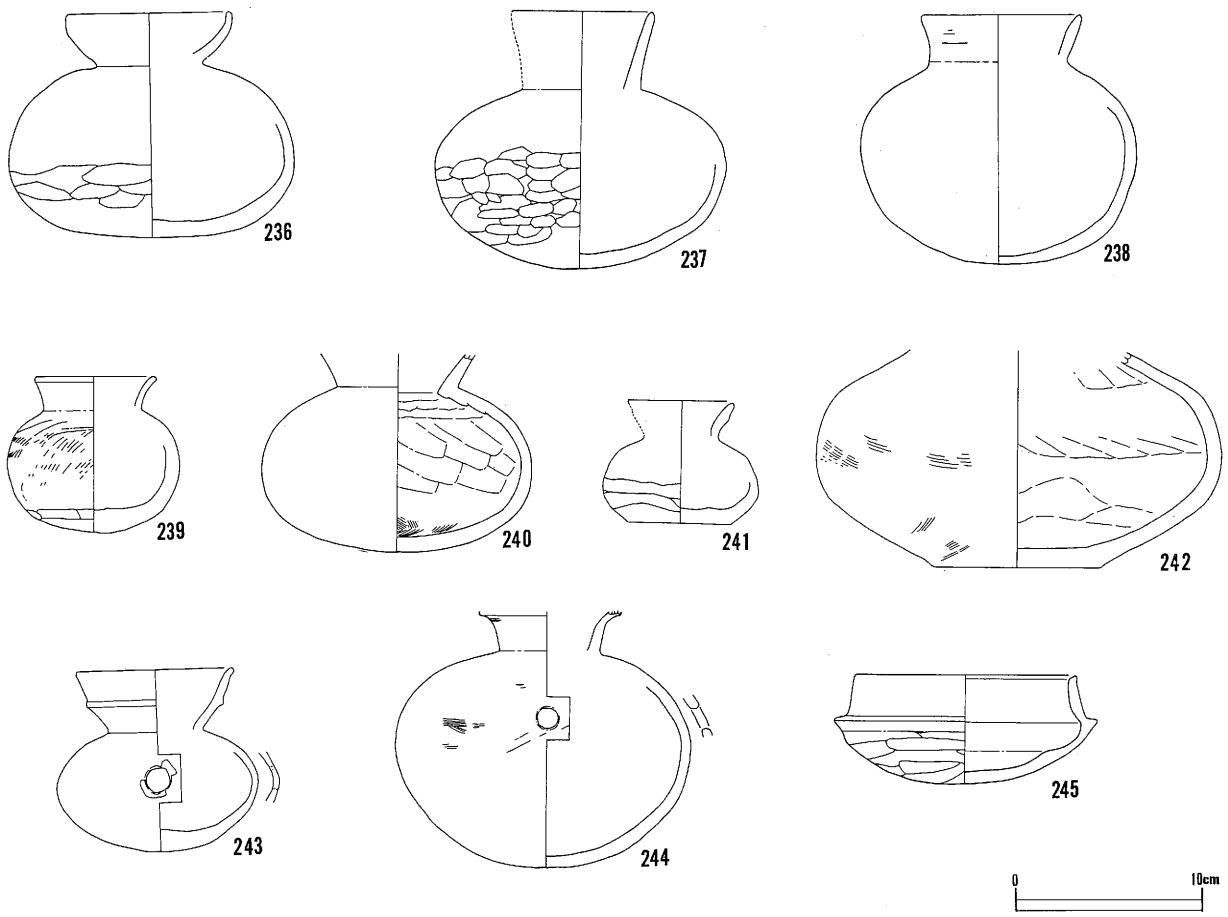
第8図　土器（6）


178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
0
10cm

第９図　　土器（7）


209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
0
10cm

第10図　土器（8）



第11図　　土器（9）

高丘丘陵古窯址群

1

中野市歴史民俗資料館には、昭和38年から40年代、金井汲次等によって発掘調査された遺物の一部が収集保管されている。すでに報告されているものもあるが、不十分な部分もある。そこで、当館では改めて、収蔵資料の再実測を行い資料化したのが本書である。収蔵物の整理はまだ継続中であり、金井等によって発掘された全ての古窯址出土の須恵器は提示できないが、本年までに整理した既存資料を収蔵資料集として刊行することにした。

2

高丘丘陵に分布する古窯址群の発見は金井汲次によるところが大きい。金井等は昭和39年に茶臼峯古窯址群と大久保古窯址の発掘調査の結果を報告する。この報告で、金井等は茶臼峯・大久保古窯址の編年に触れ、概ね8世紀の前半から9世紀の中葉にかけてのものであるとした。

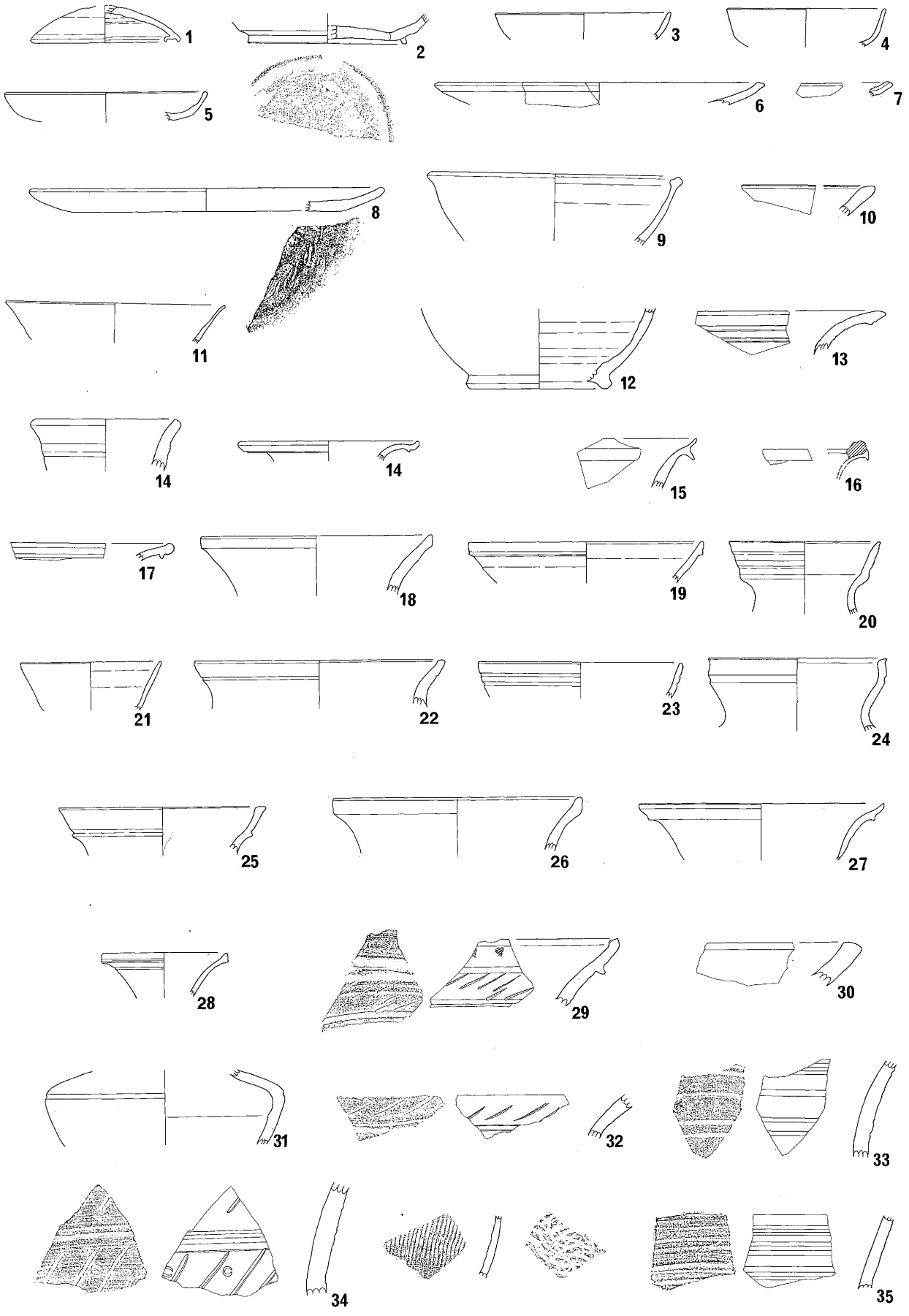
この報告後も高丘丘陵では次々に古窯址が発見され報告される。昭和42年には、金井汲次氏によって、長野県考古学会の席上で安源寺古窯址の調査結果が報告された。次いで、立ヶ花表山古窯址の調査が金井汲次・金井正彦氏によって報告されている（金井汲等・1971）。さらに、昭和48年には、金井正彦が茶臼峯７号窯址の調査結果を報告している（金井正・1973）。

しかし、この間、須恵器編年は概ね8世紀から9世紀の中葉にかけてのものとして一括され、昭和39年の金井汲次等の編年観が踏襲され続け、トンネル式から半地下式へと窯の構造が変遷するといった言及や糸切底の出現は平安時代以降であるといった言及はあったけれども、編年研究は停滞していた。

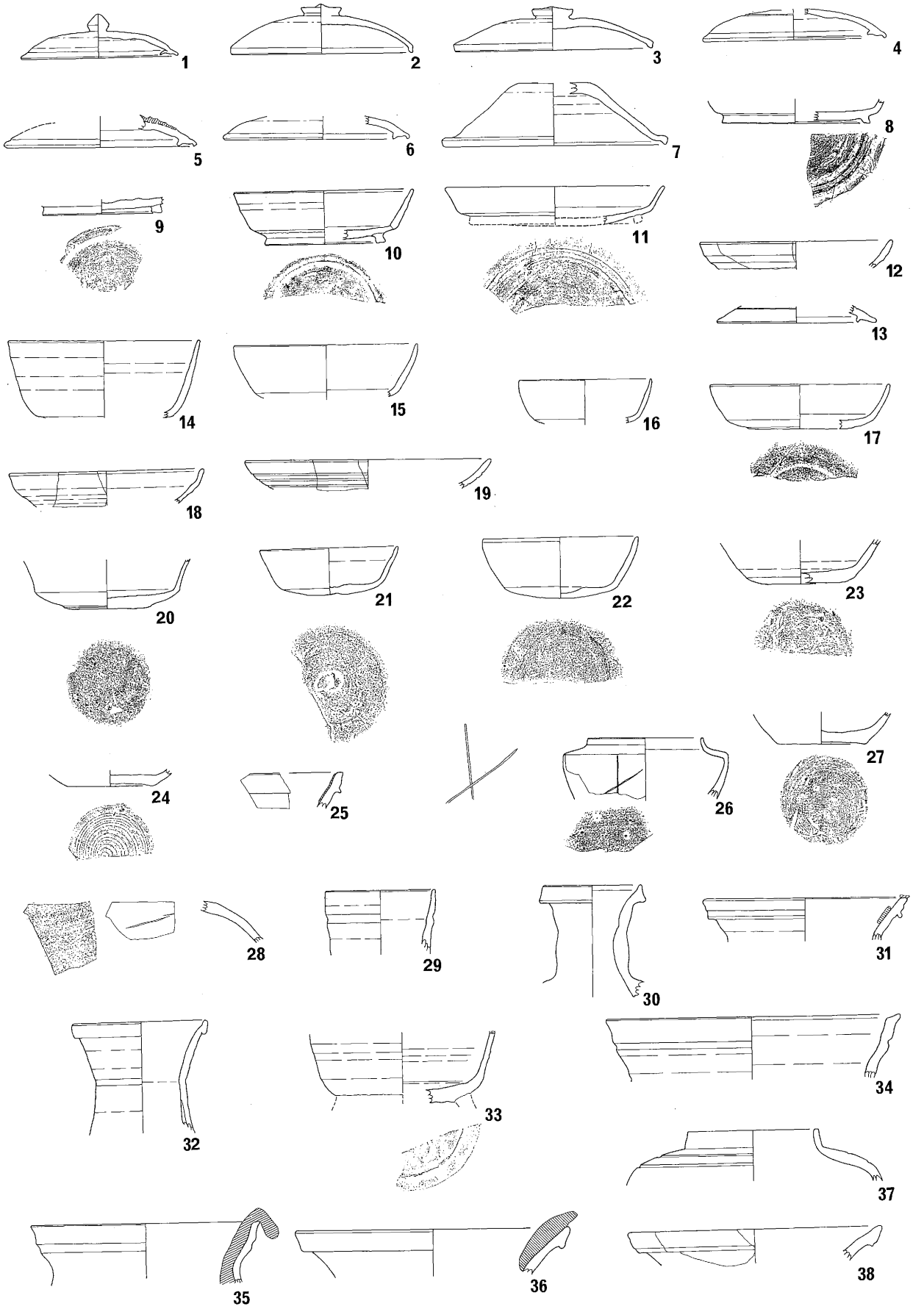
こうした研究状況に新た問題点を投げかけたのは、笹澤宏・原田勝美であった。昭和49年、笹澤等は茶臼峯で、あらたな窯址を発見し、それを茶臼峯９号窯と名づけ、その編年的な位置についての検討を加えた。結果、茶臼峯9号窯址の須恵器は７世紀前葉の後半から７世紀の中葉にかけてのものであり、陶邑編年のＴＫ217に相当するものだとした。また、すでに報告されていた茶臼峯第６号窯の須恵器は７世紀末葉のものであるとした（笹澤・原田1974）。

こうして、高丘古窯址群の操業は７世紀の前半に始まることが明かにされたのであるが、それまでに報告されていた茶臼峯や大久保等の古窯址から出土した須恵器編年の細分化は行われることがなかった。

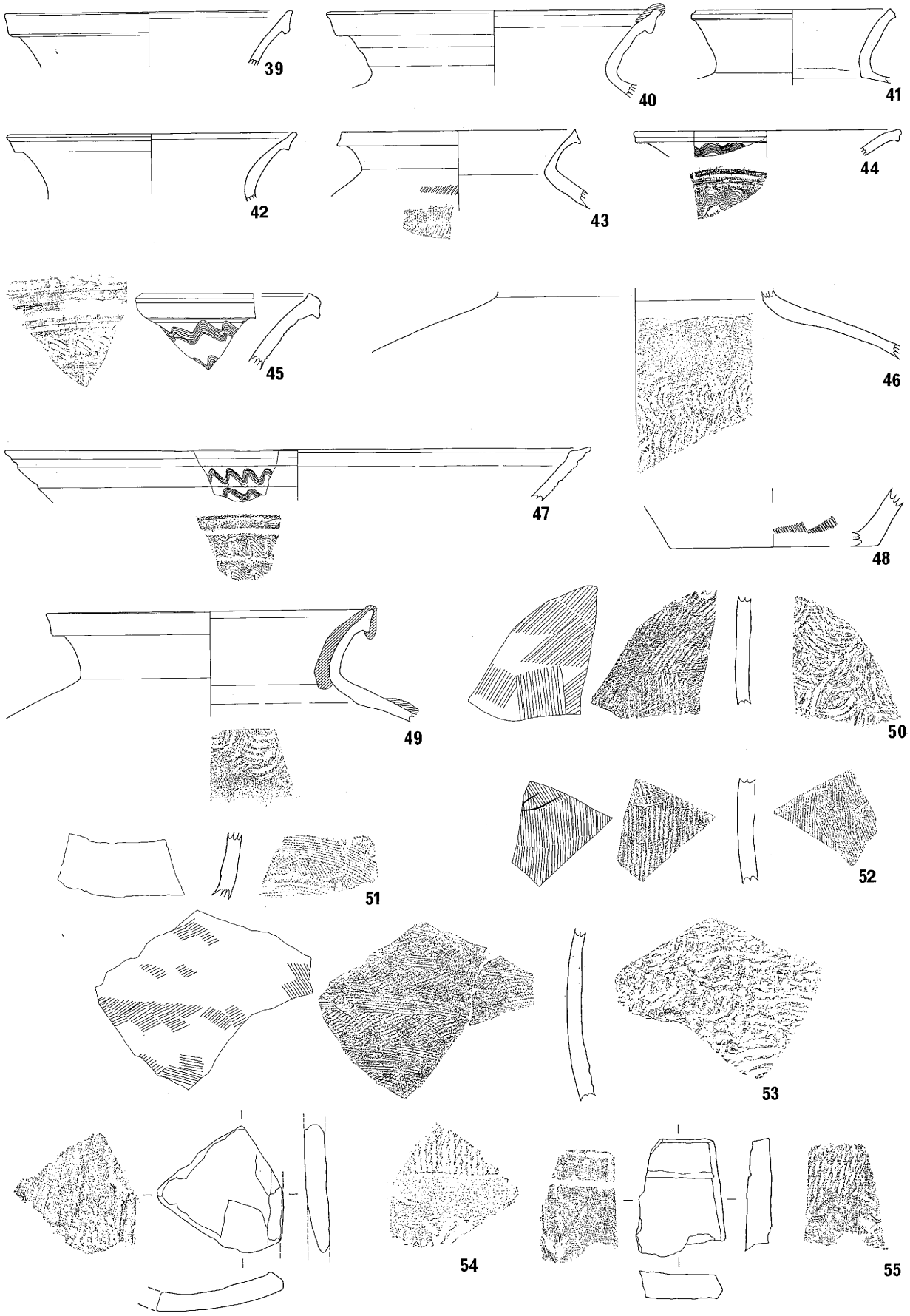
平成4年から上信越自動車道の建設にともない高丘丘陵のいくつかの古窯址が発掘調査され、高丘丘陵における古窯址や須恵器の細分編年された（中島英・1997）。



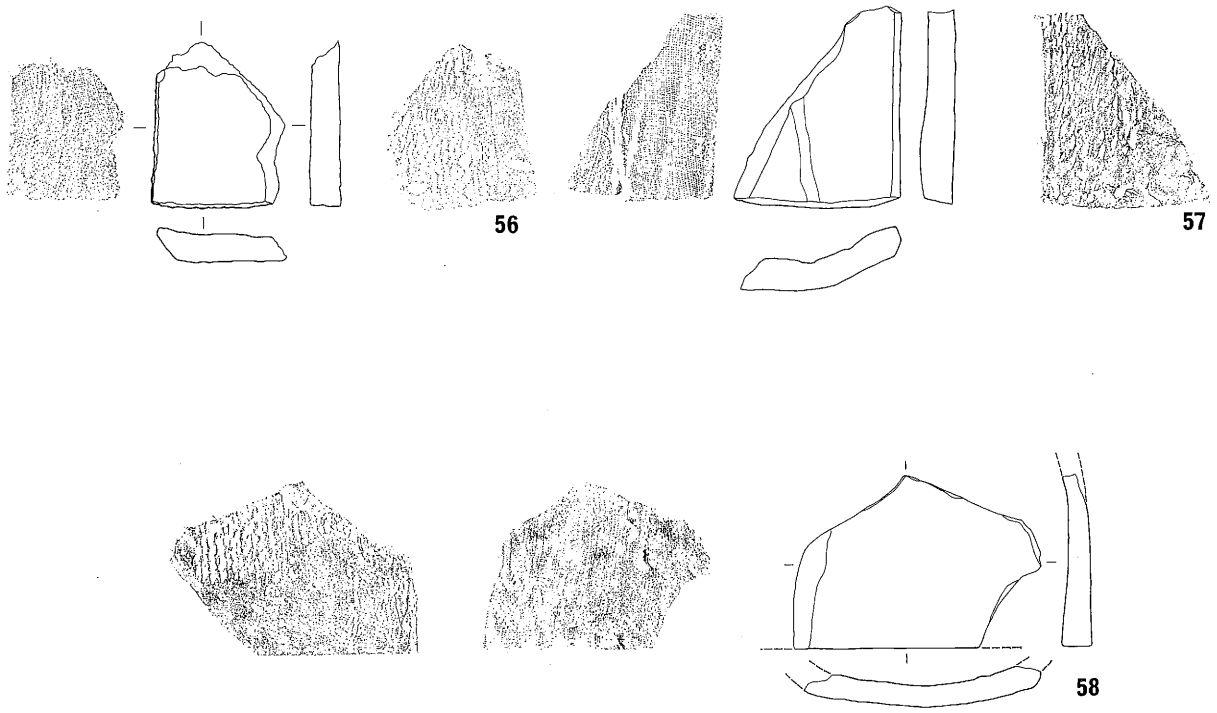
第17図　　茶臼峰６号窯(1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

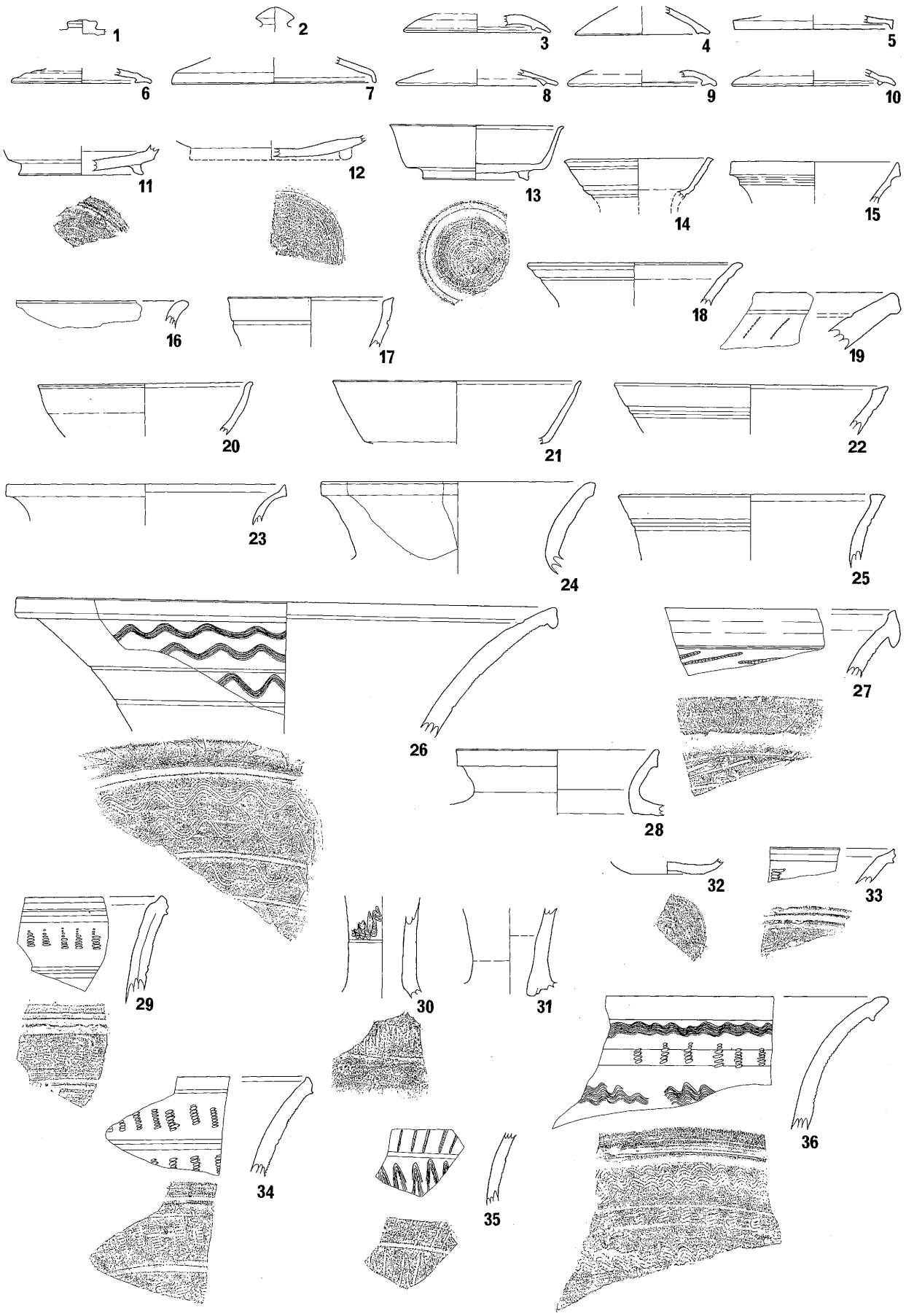
第18図　　がまん淵



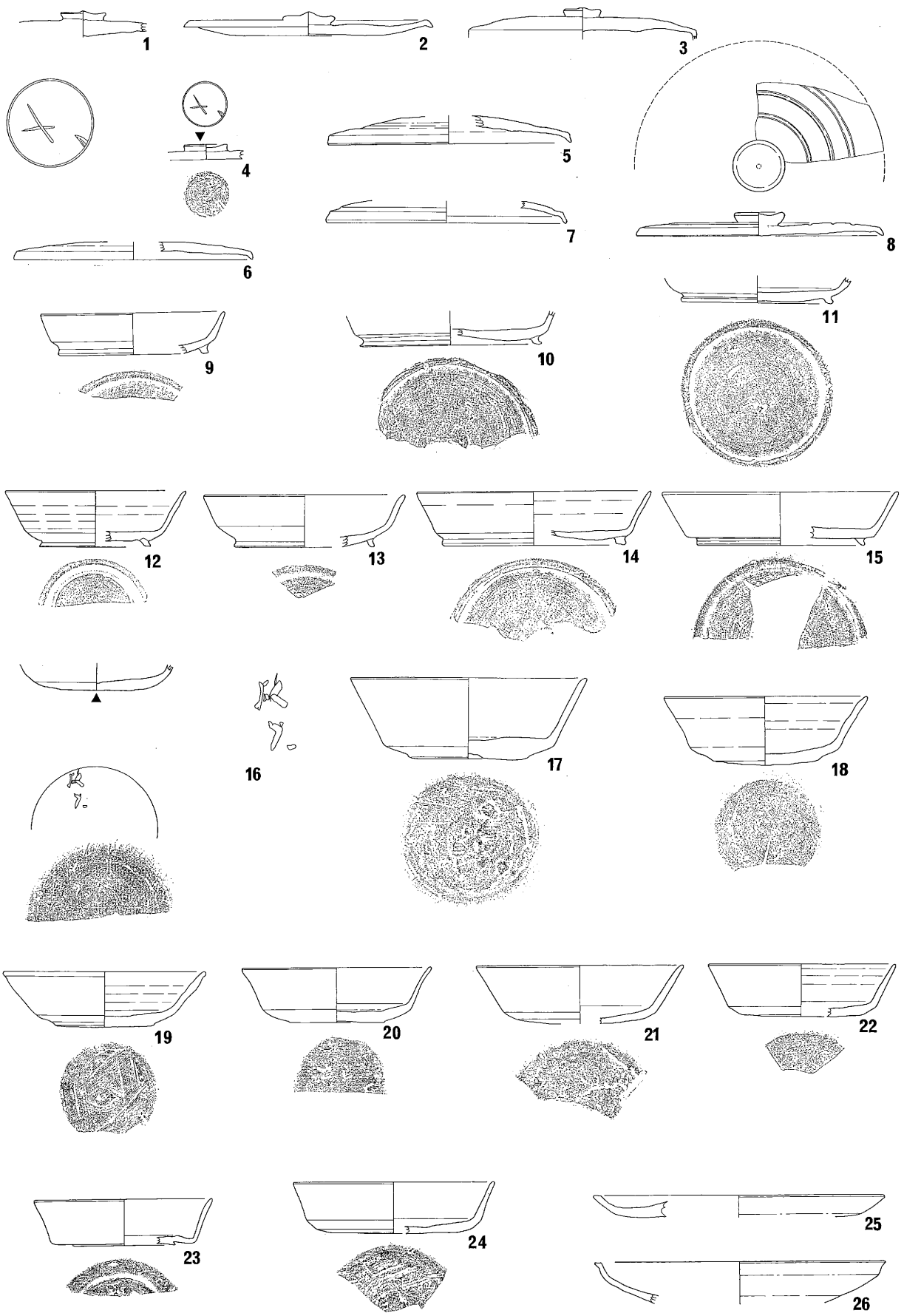
第19図　　がまん淵



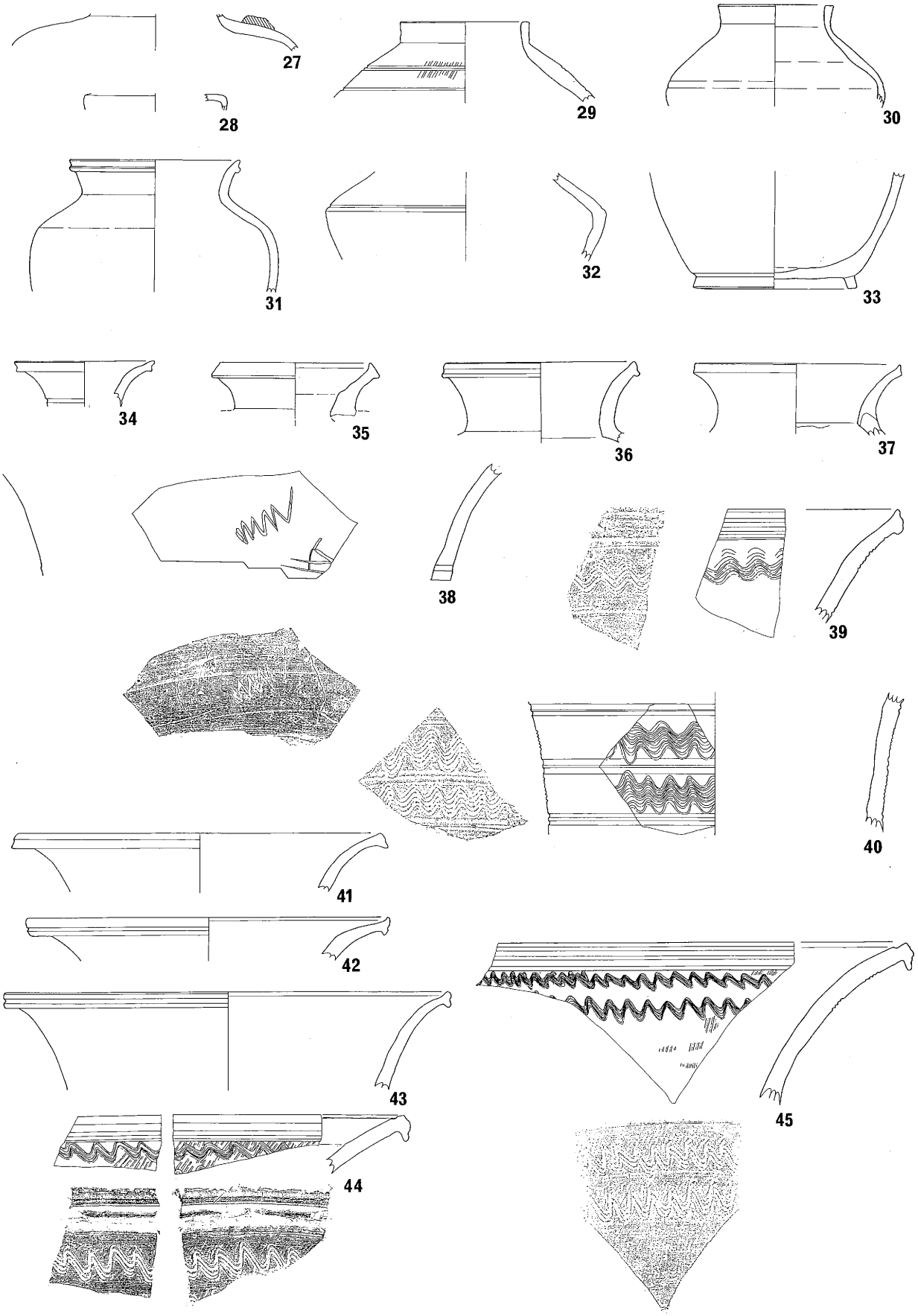
第20図　　がまん淵


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

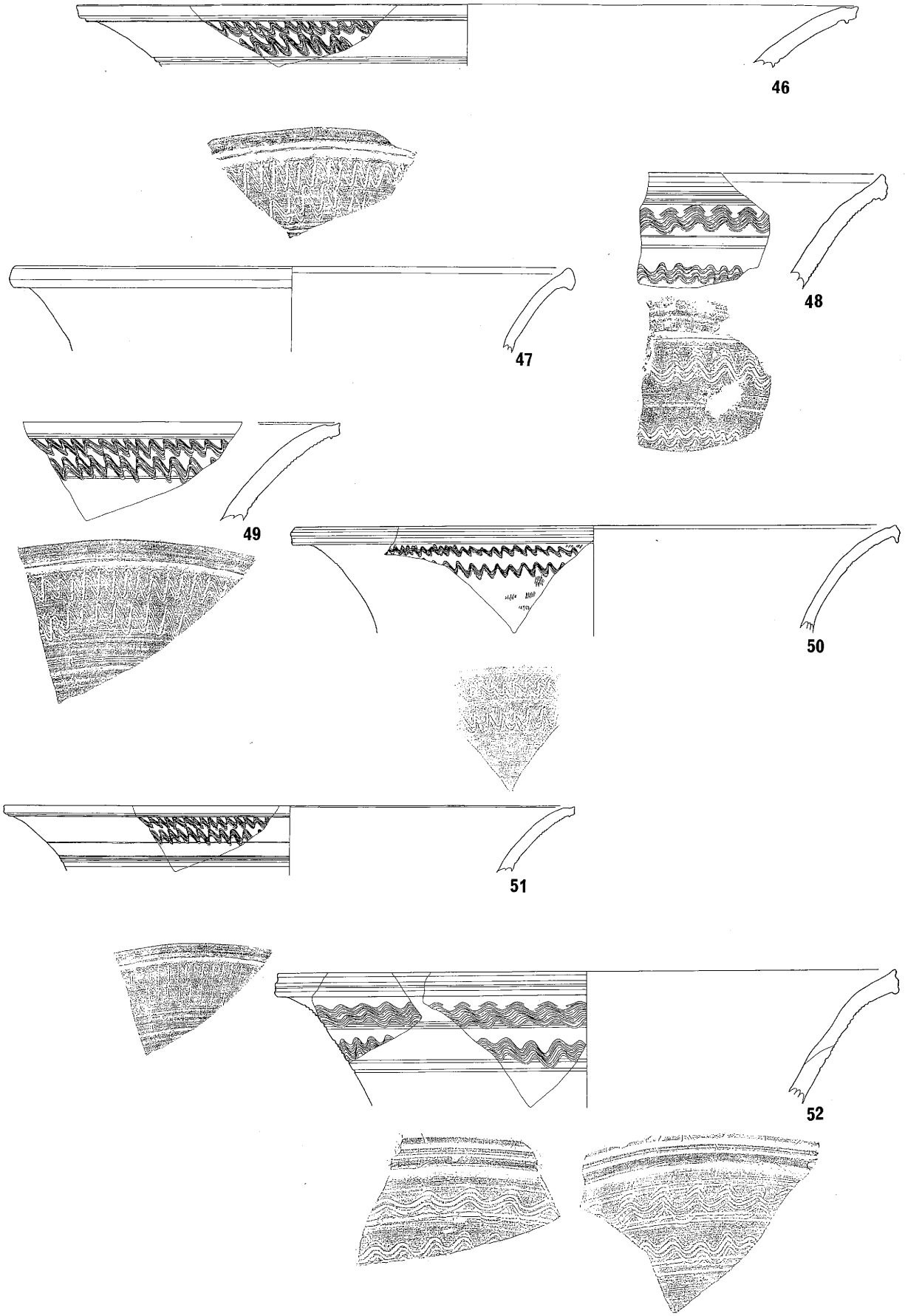
第21図　　茶臼窯８号窯



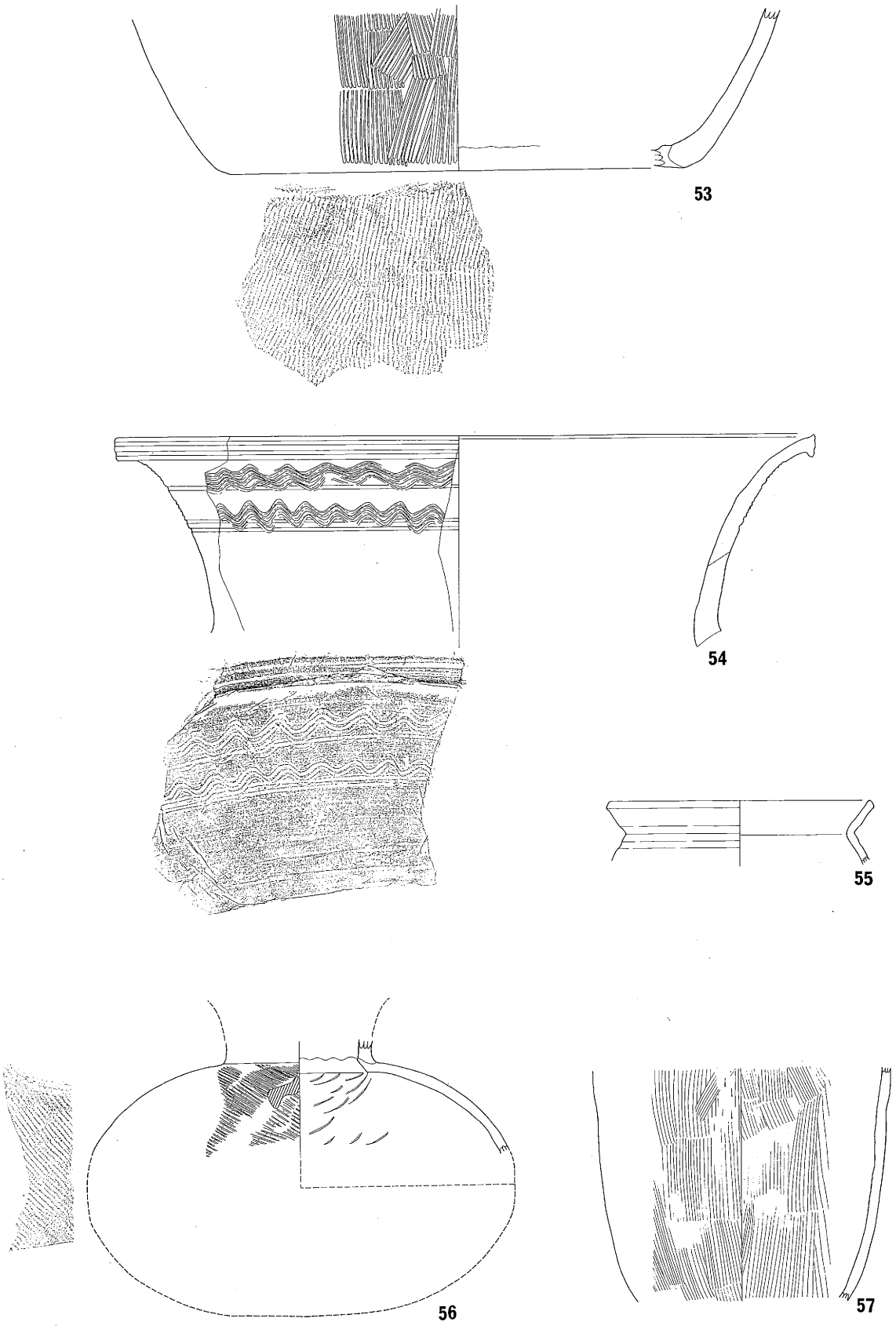
第22図　　立ヶ花表山(1)



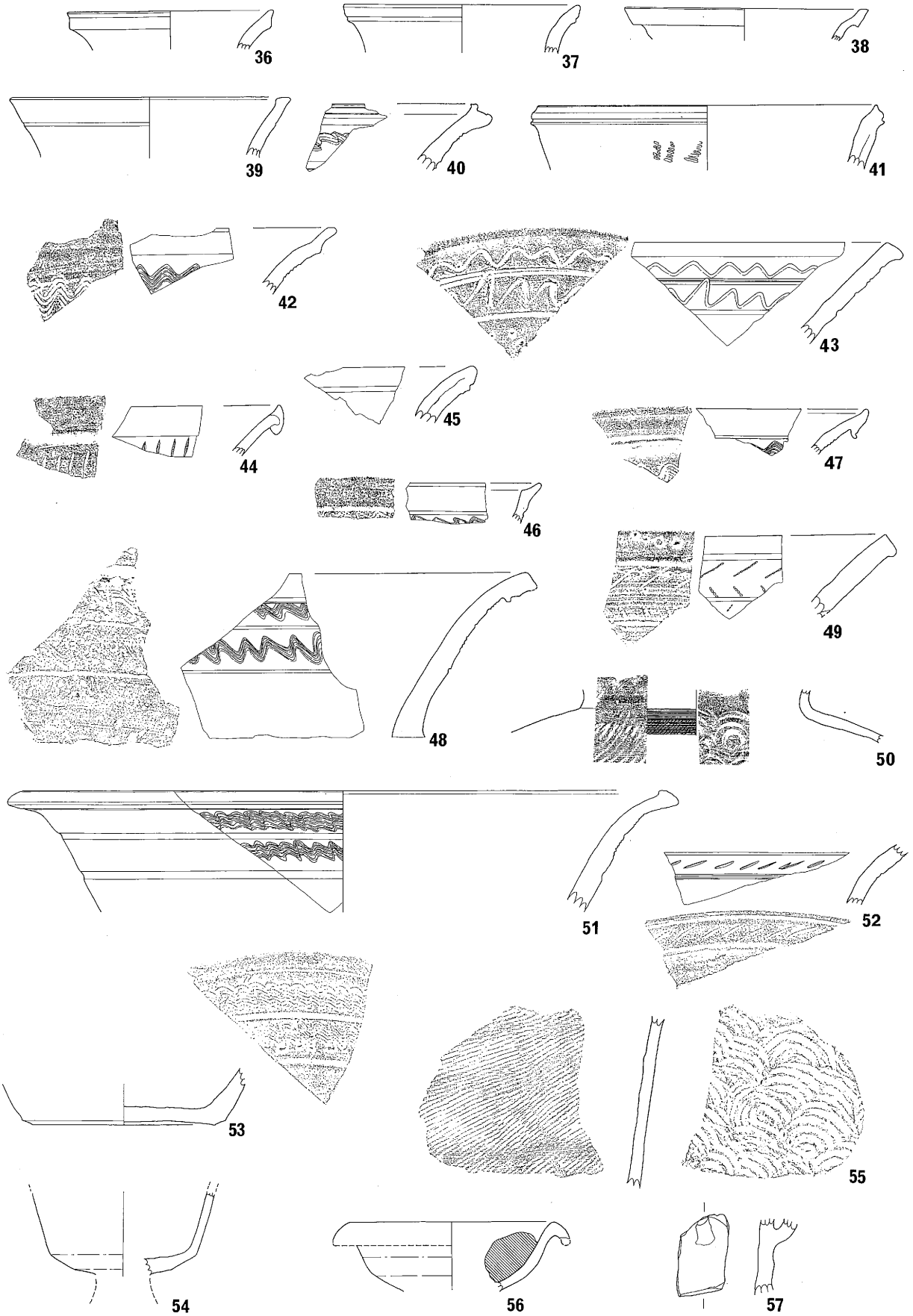
第23図　　立ヶ花表山(2)



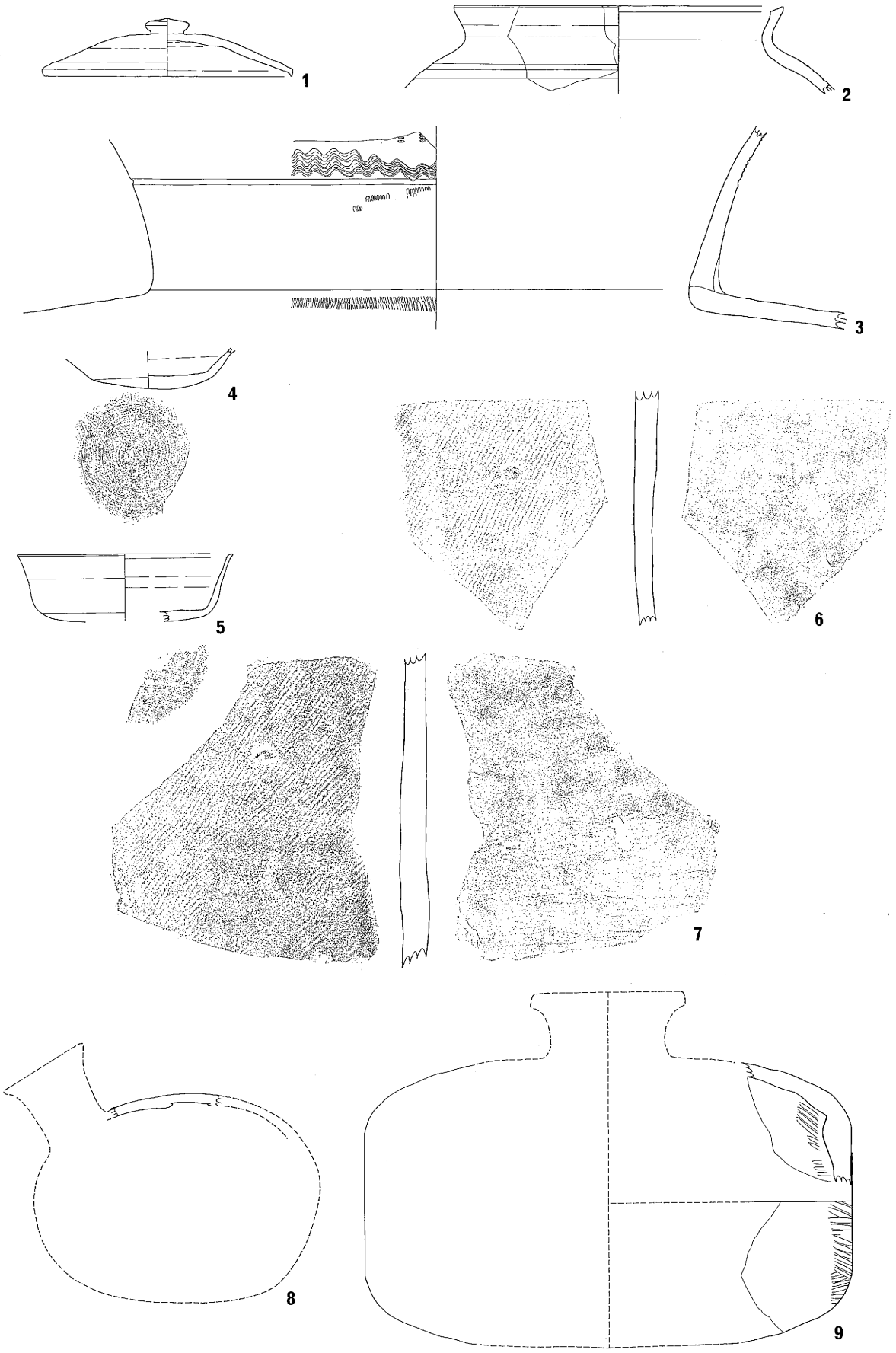
第24図　　立ヶ花表山(3)



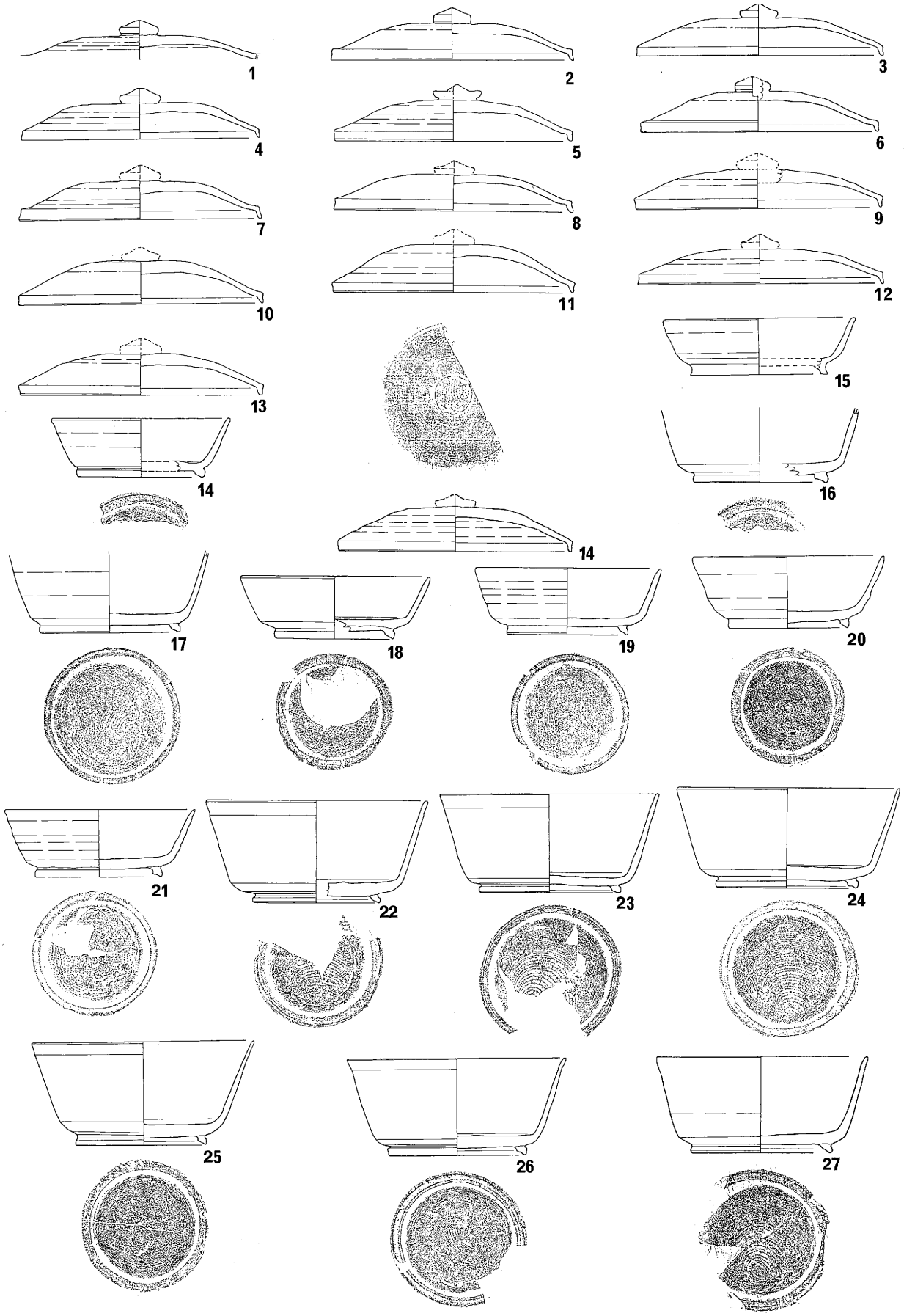
第25図　　立ヶ花表山(4)



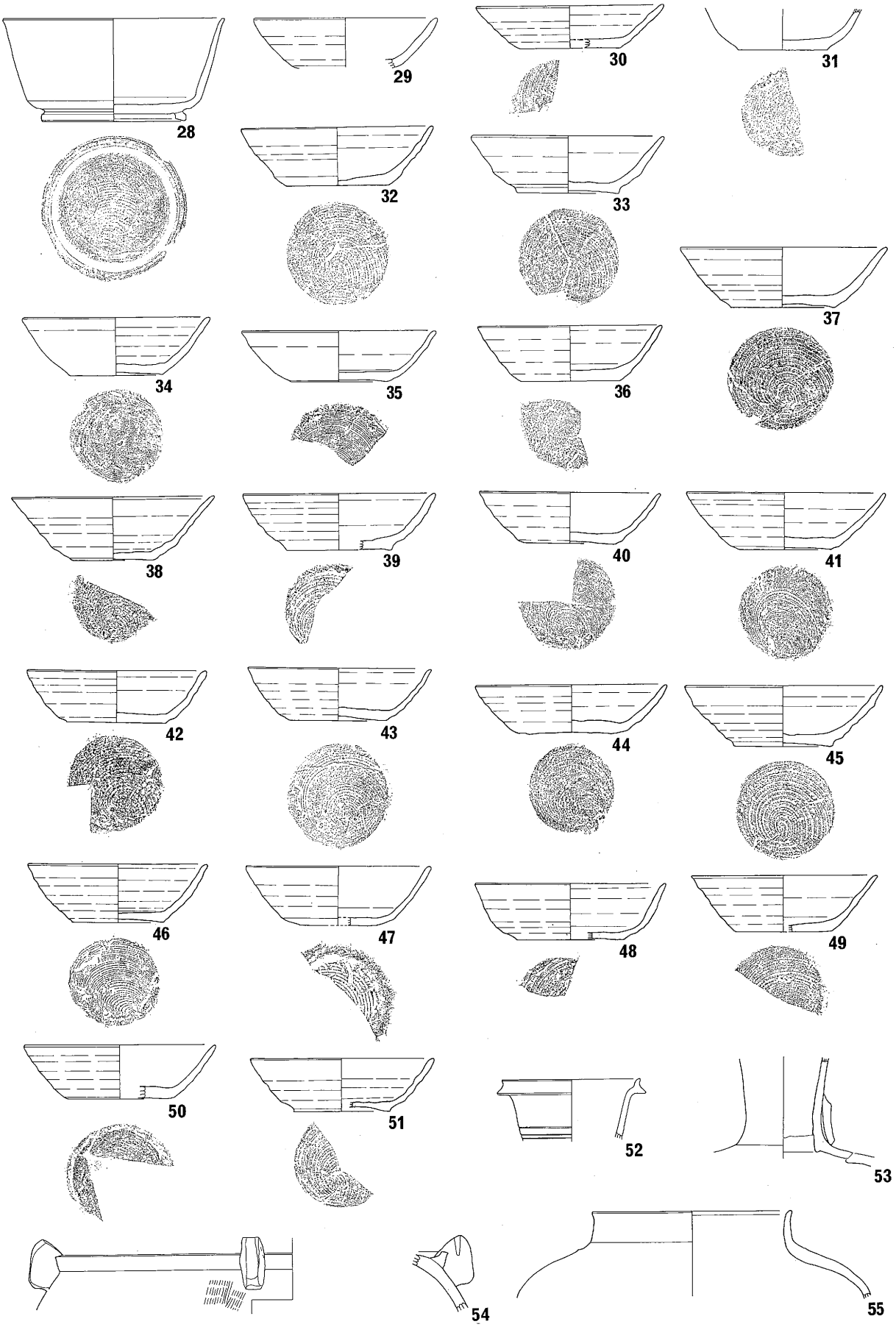
第26図　　茶臼峰6号窯(2)



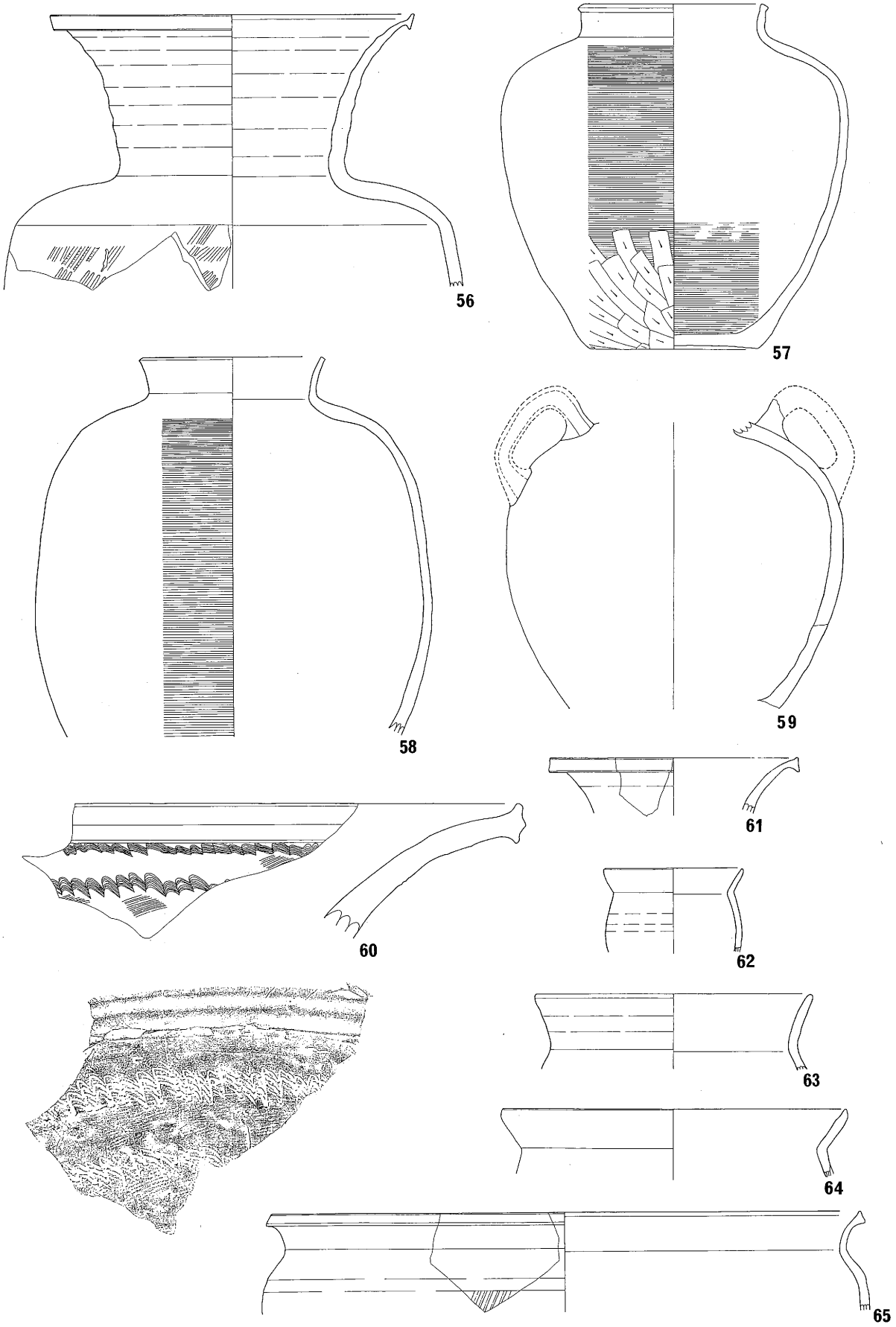
第27図　　茶臼峰7号窯



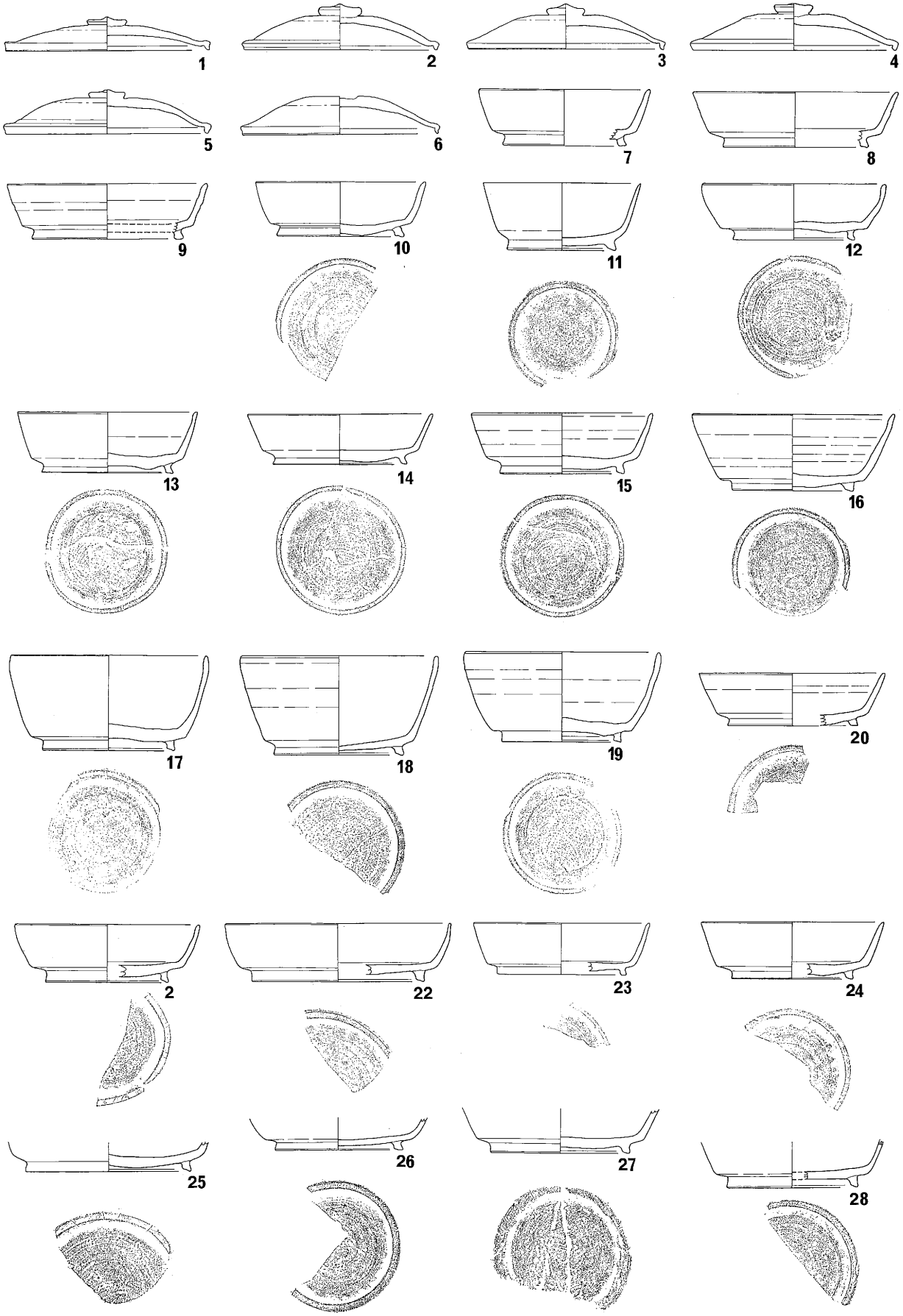
第28図　　中原(1)


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

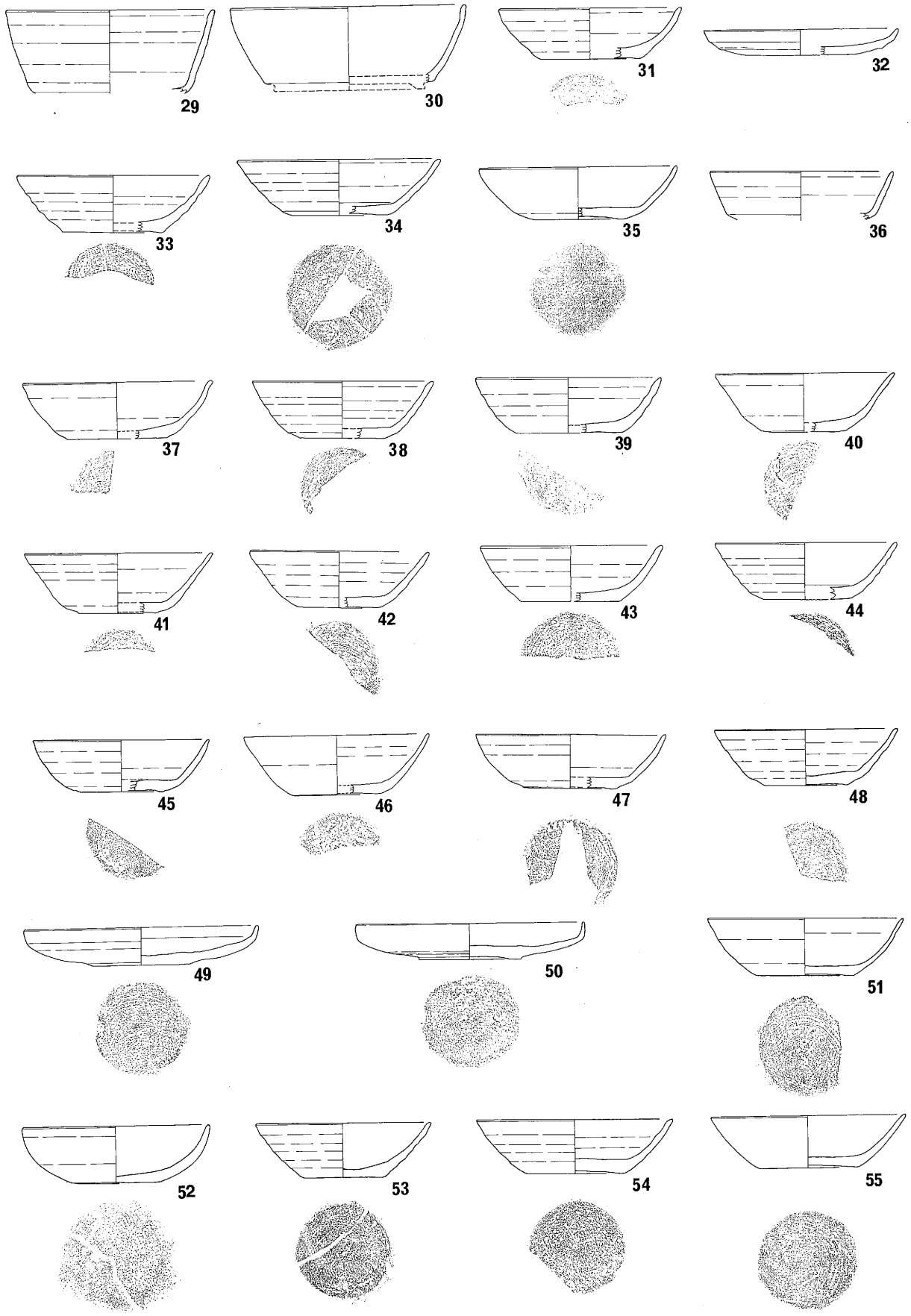
第29図　　中原(2)



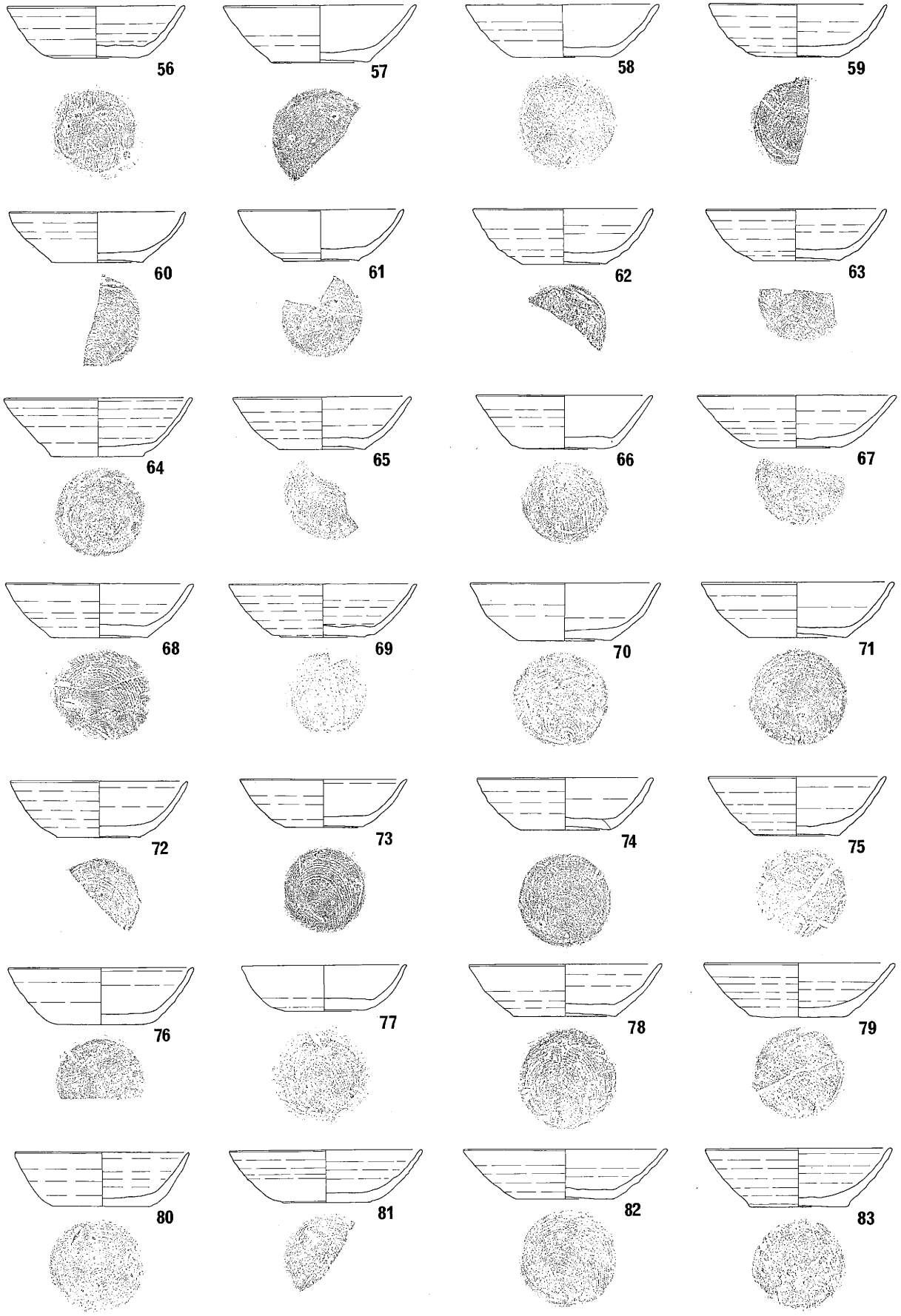
第30図　　中原(3)



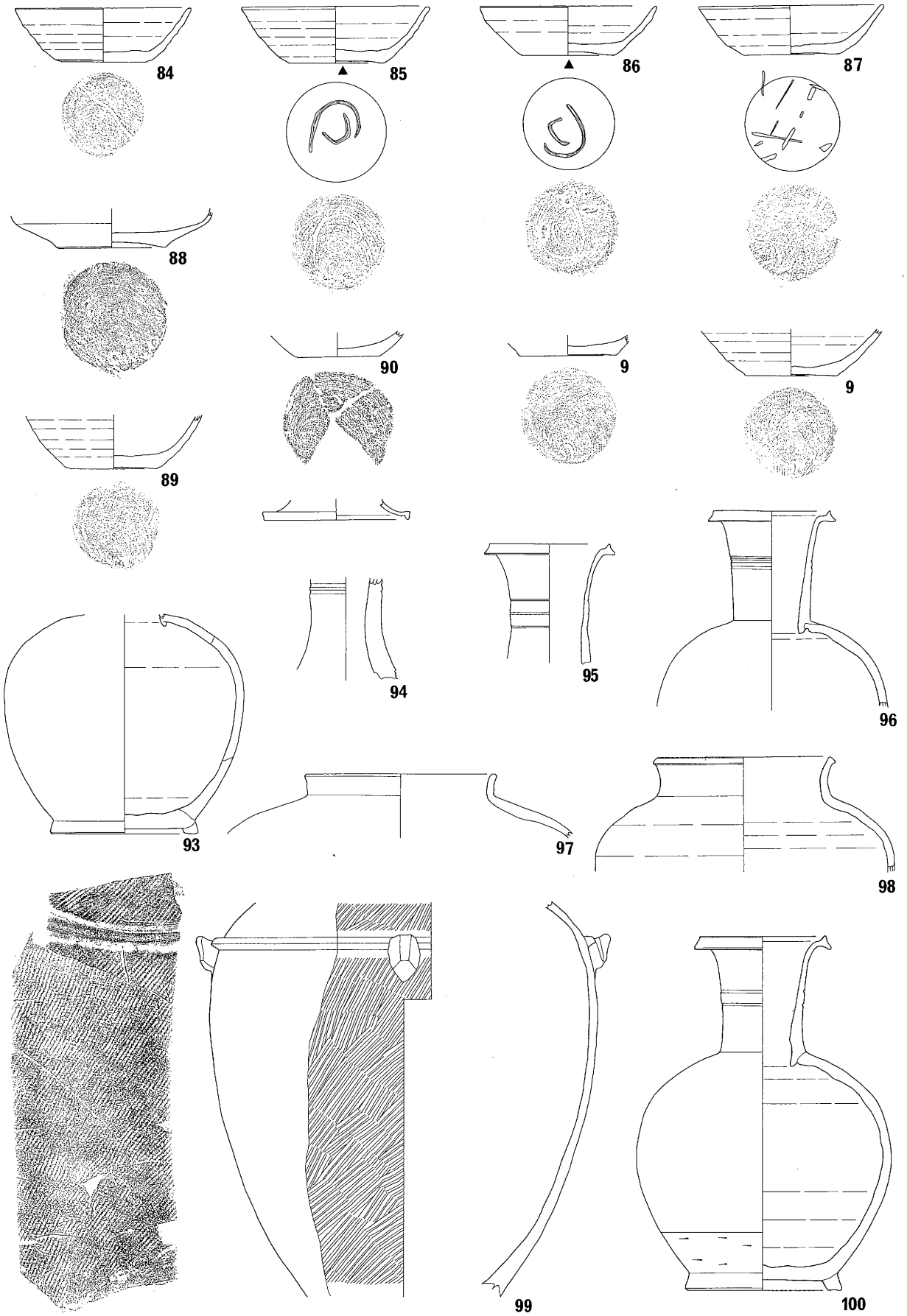
第31図　　立ヶ花(1)


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

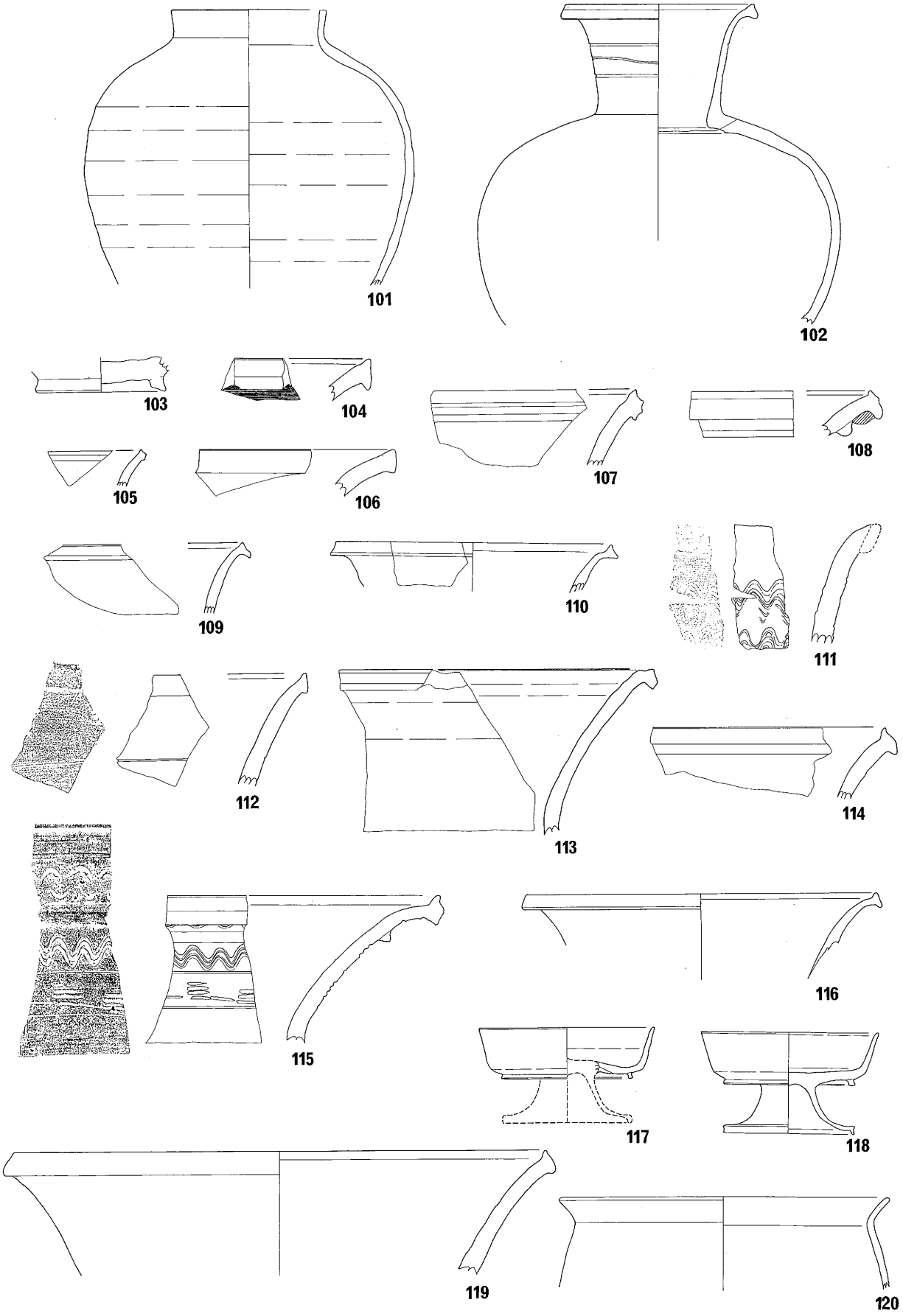
第32図　　立ヶ花(2)


56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83

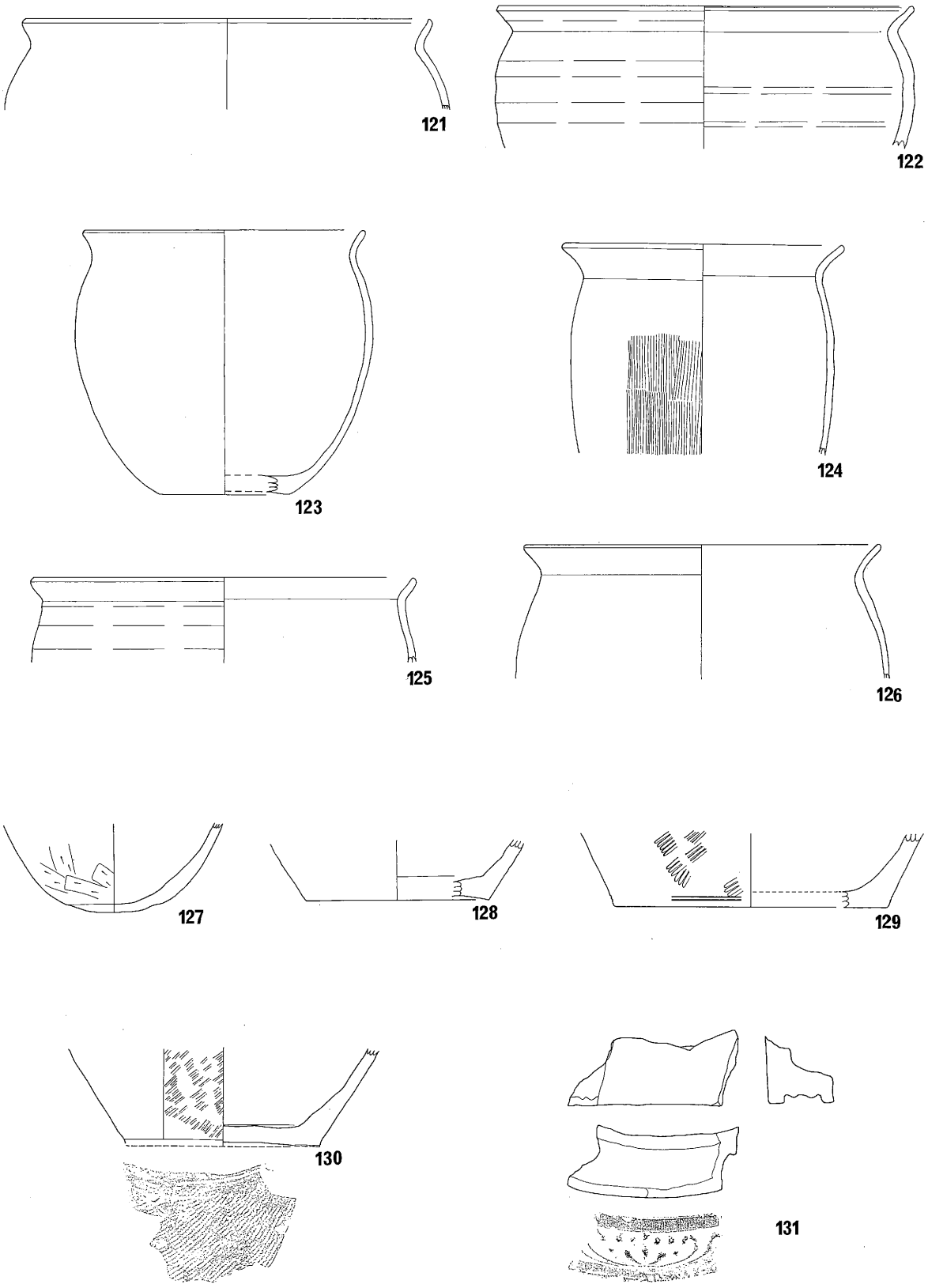
第33図　　立ヶ花(3)



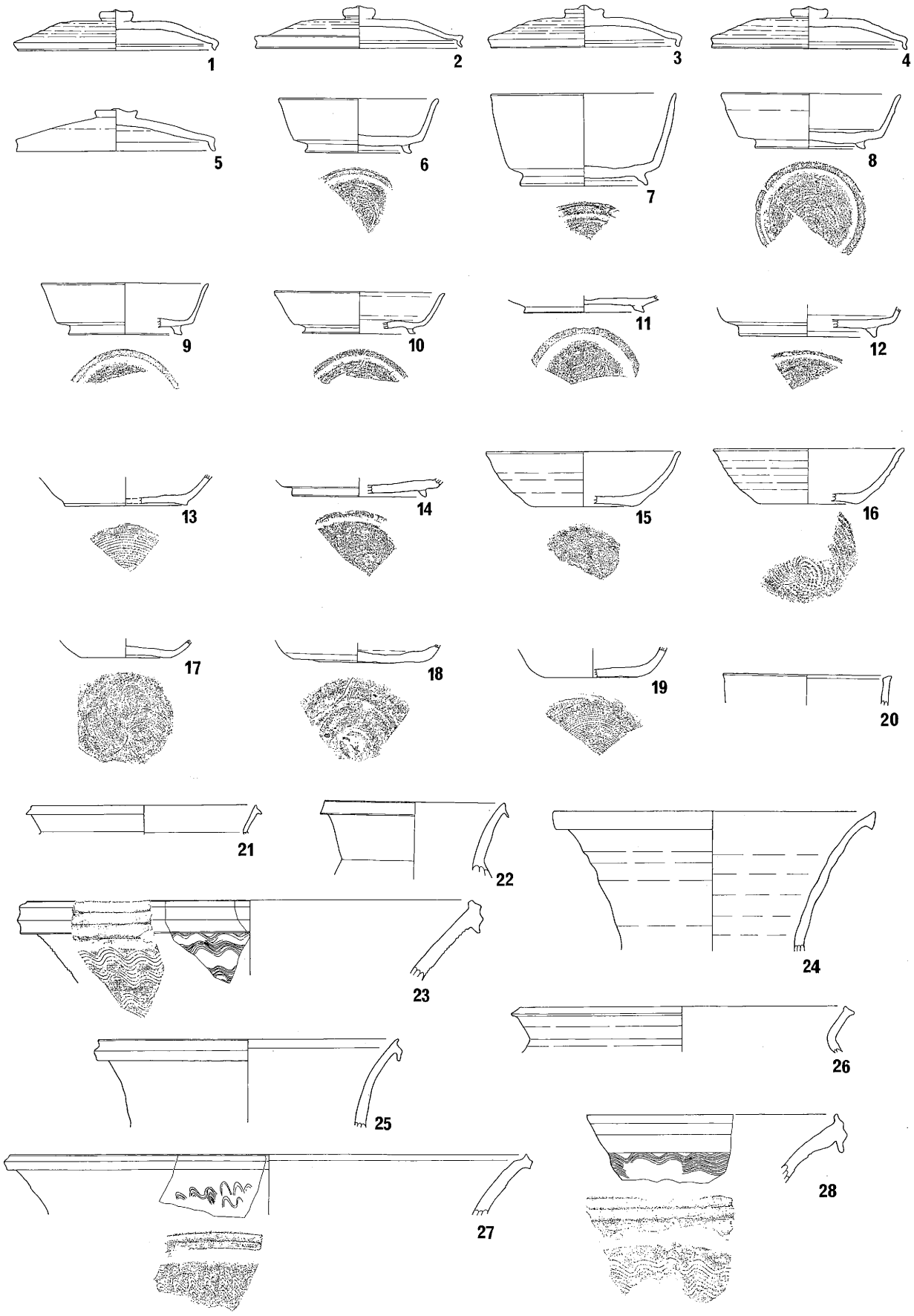
第34図　　立ヶ花(4)


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120

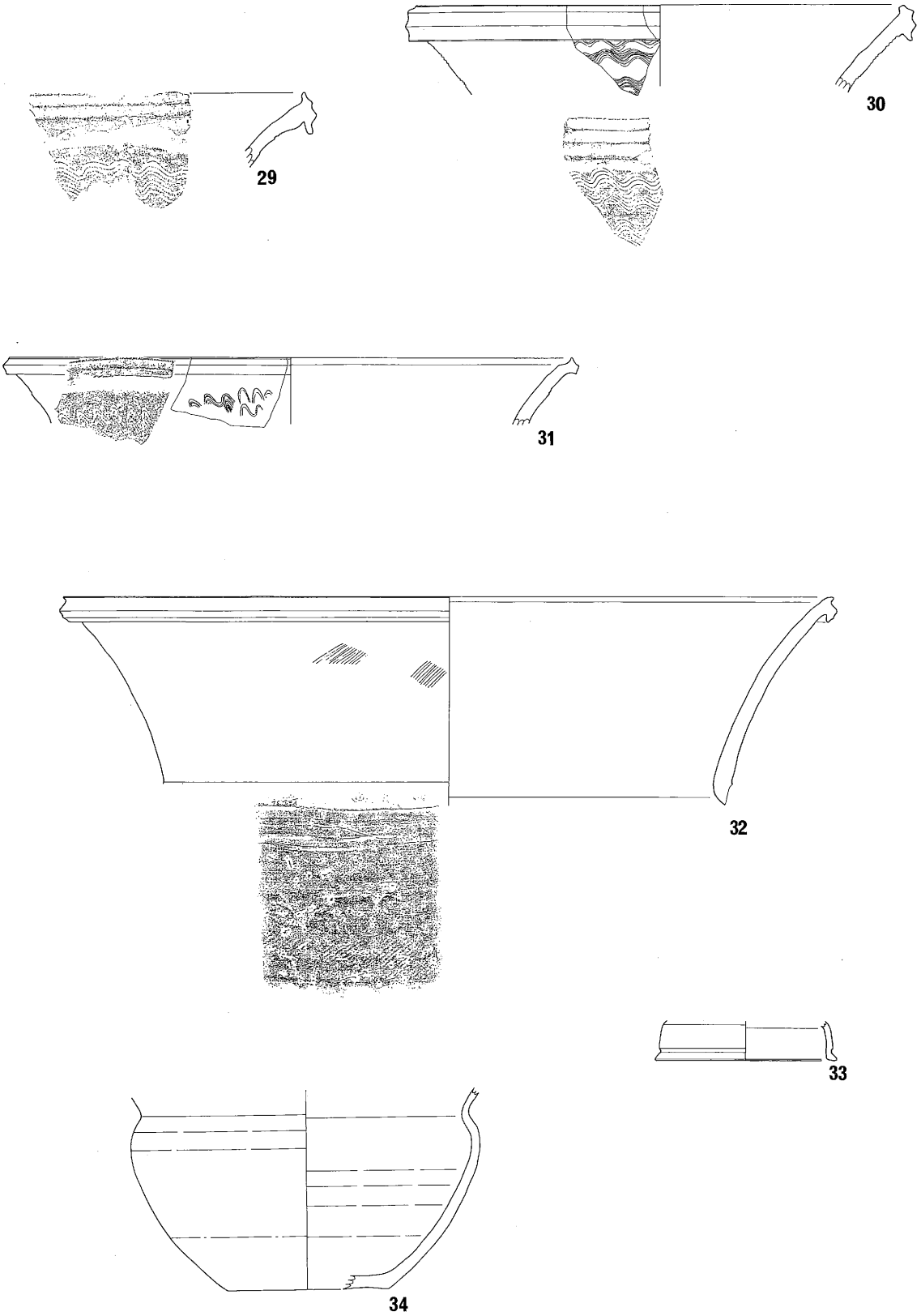
第35図　　立ヶ花(5)



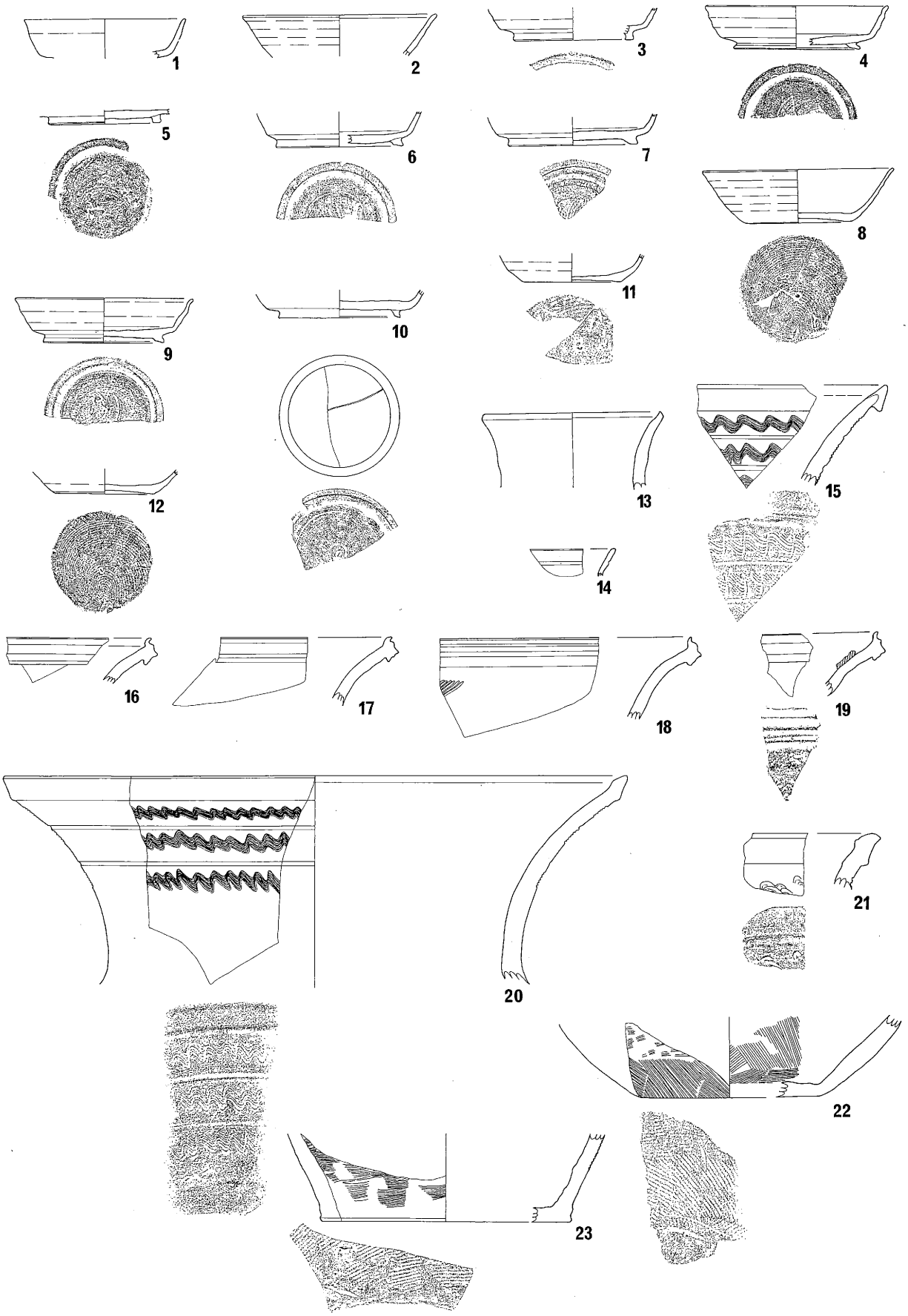
第36図　　立ヶ花(6)



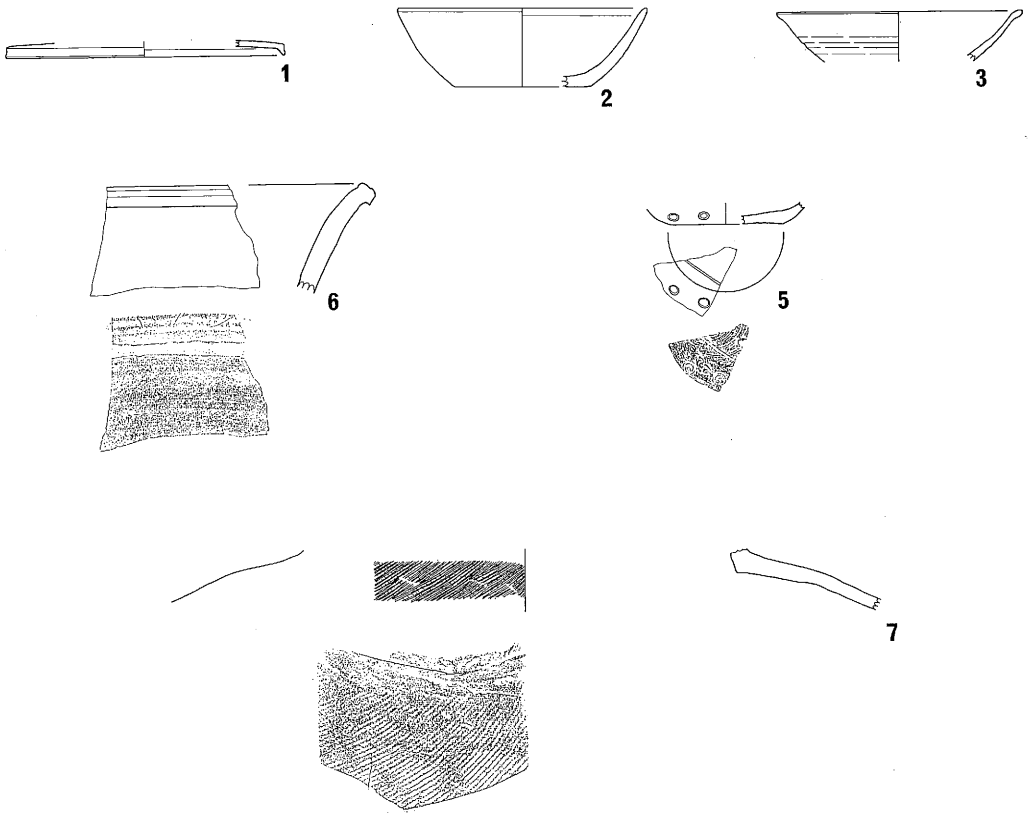
第37図　　上の山



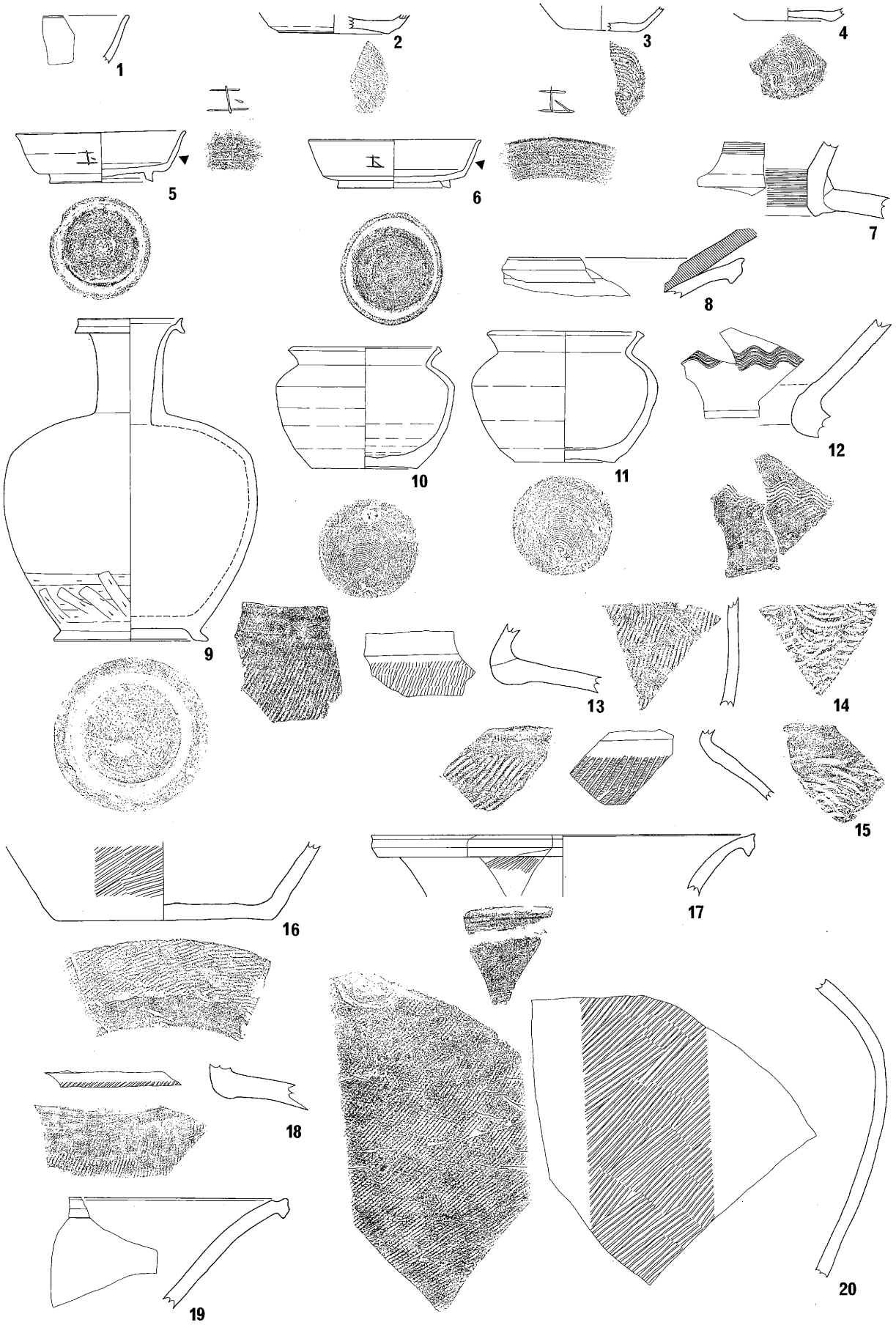
第38図　　上の山



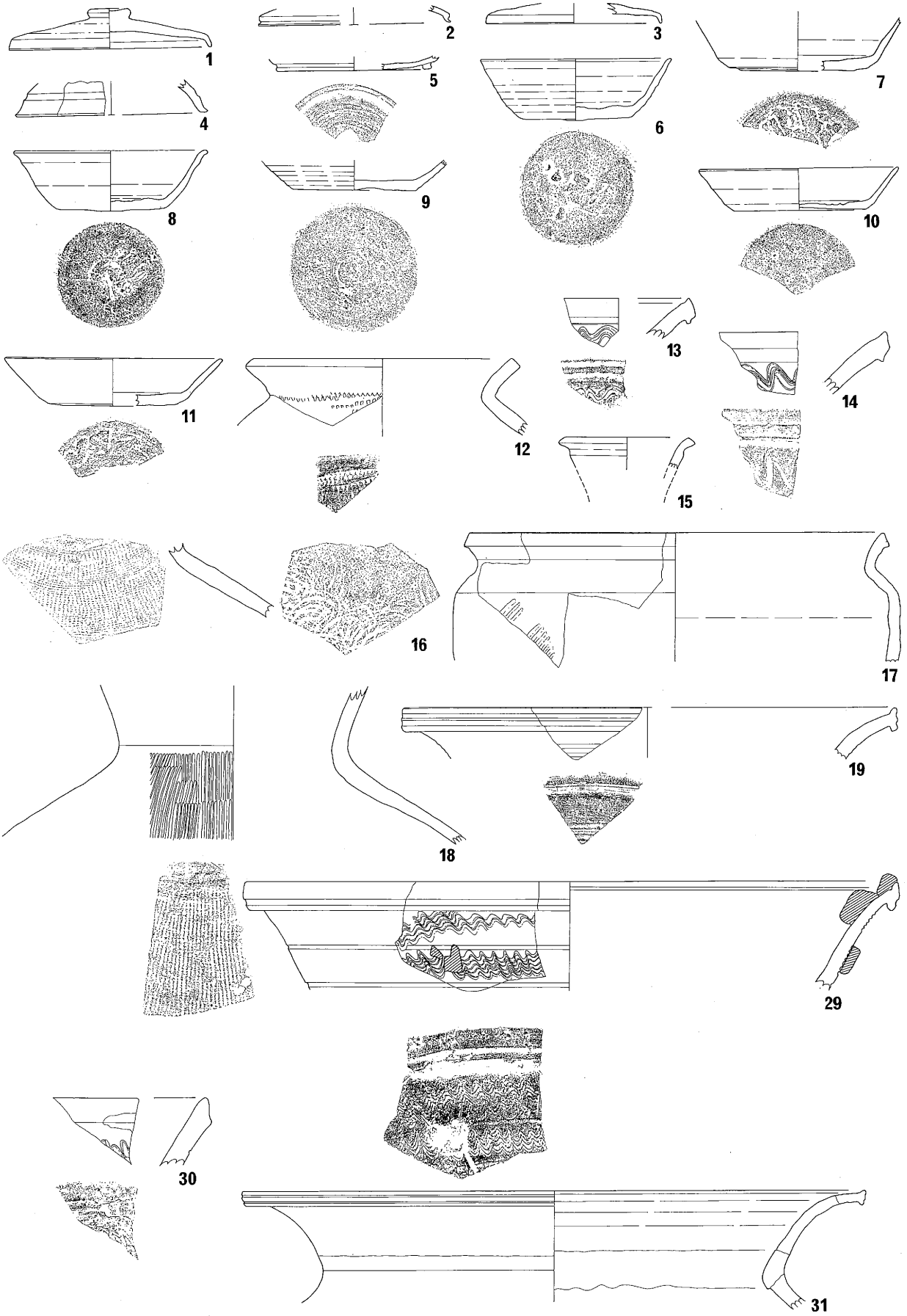
第39図　　茶臼峰3号窯



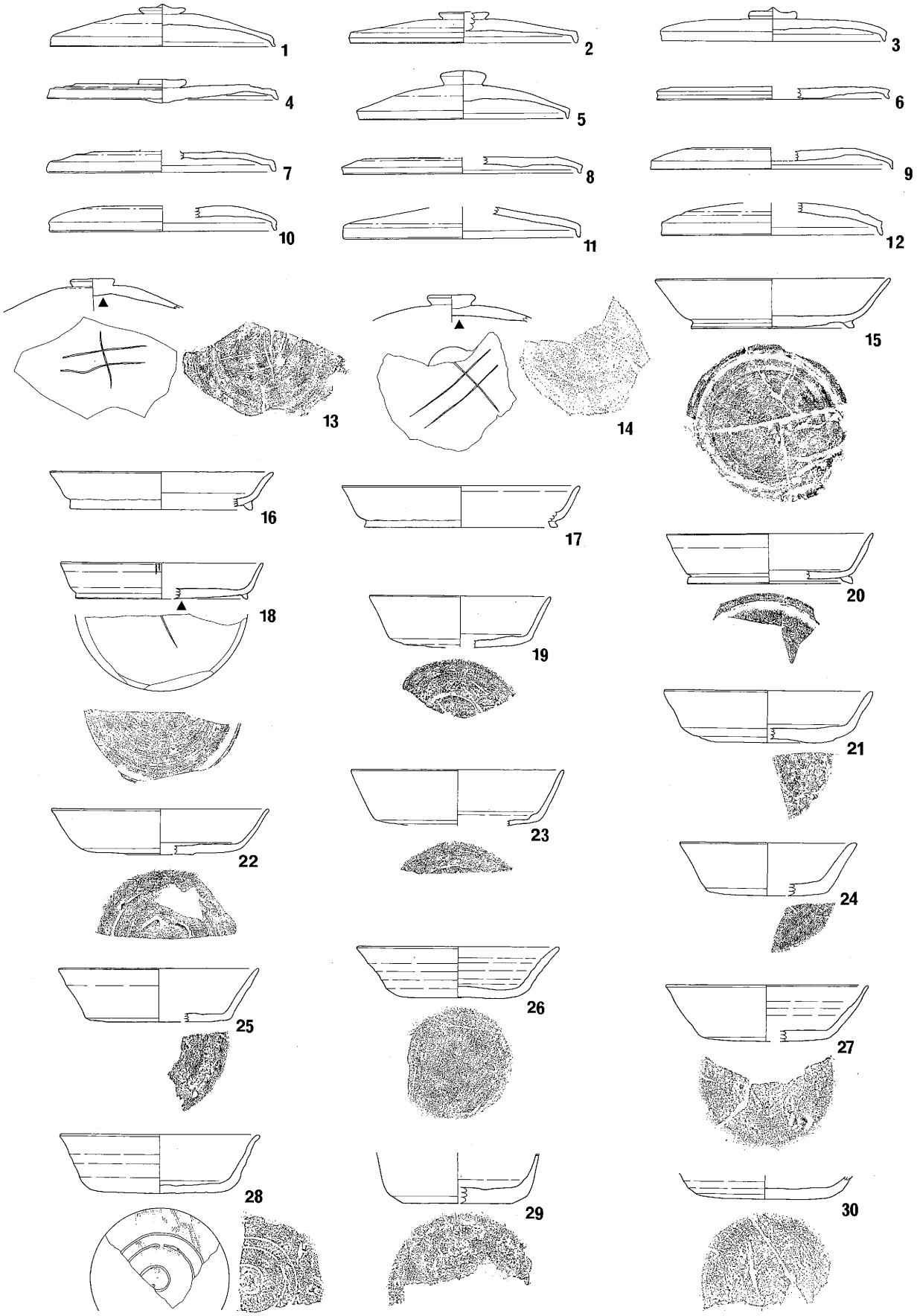
第40図　　茶臼峰4号窯



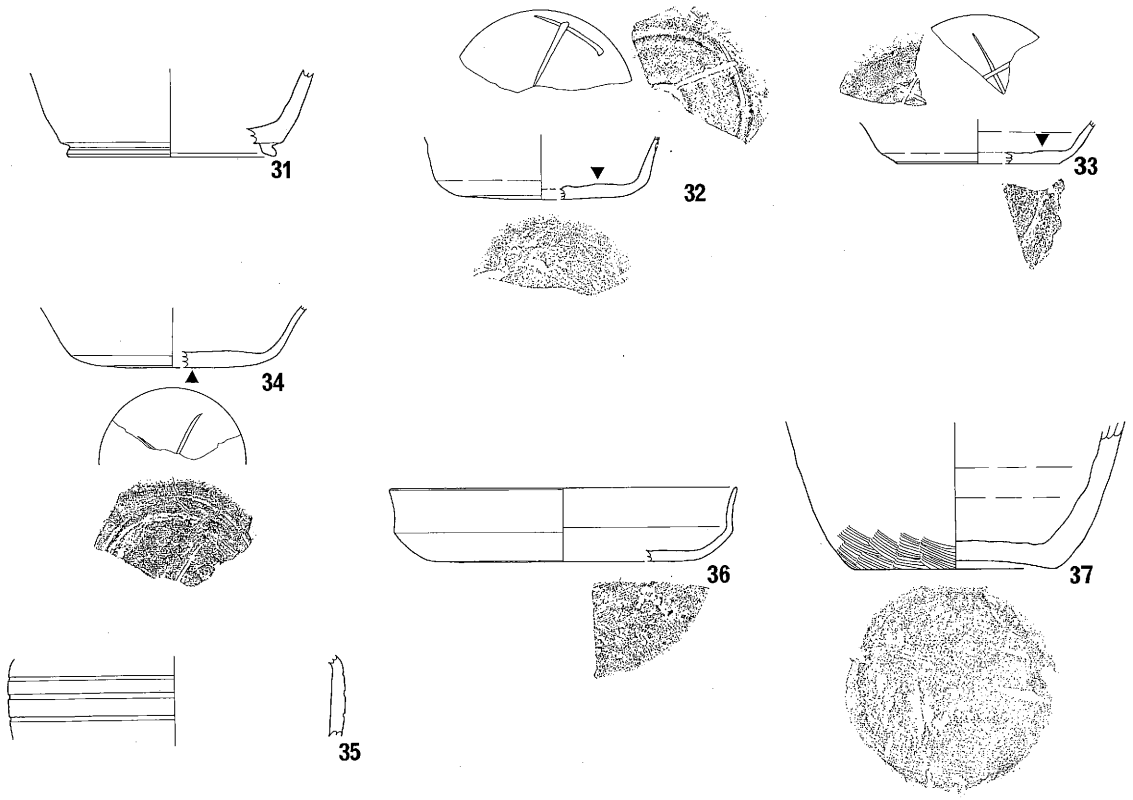
第41図　　茶臼峰5号窯



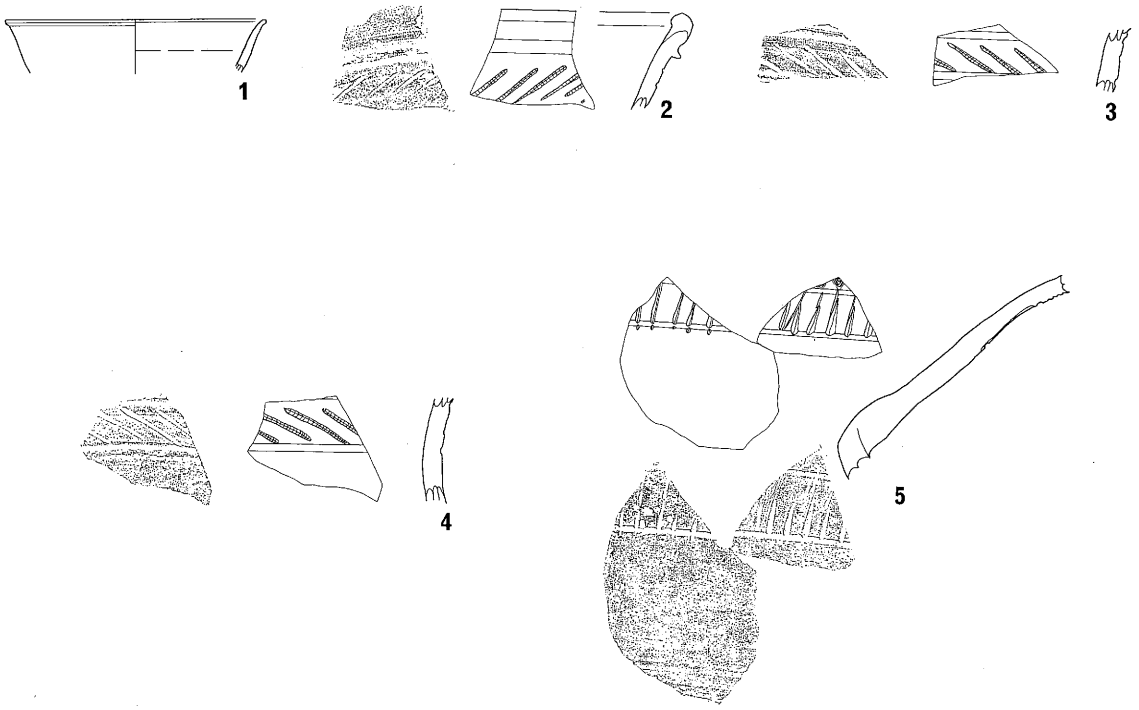
第42図　　大久保


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第43図　　清水山(1)



第44図　　清水山(2)



第45図　　茶臼峰

中野市歴史民俗資料館
集蔵品集成（古代編）

発　行　平成十五年三月三一日
発行者　長野県中野市
　　教育委員会

印刷所　信毎書籍印刷